魔法少女リリカルなのは～運命を欲する男～

秋風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは～運命を欲する男～

【Ｎコード】
Ｎ９０１３Ｐ

【作者名】
秋風

【あらすじ】
青年はある日、自らの命を絶った。それは世界に絶望した結果だった。だが・・・その死は決められた運命ではなかった。神々の争いによって生まれた間違った運命。それに巻き込まれた家族と恋人。青年はその全ての運命を取り戻すために戦う。それがかつて冥界の神だった男や、大天使と呼ばれた男であろうとも。青年の運命をかけた戦いが始まる

幻想００：運命を変えられた男（前書き）

なが～い、０話です
今回東方が題材に含まれますが、初めに言っておきます。この作品には

紅魔郷

妖々夢

しか出ません。てか、知りませんので・・・

では、お楽しみください

幻想００：運命を変えられた男

「死ねた・・・」

突然だが、俺は死んだ。簡単に言えば自殺・・・自殺っていうか、『自殺しようかな』なんて車の前に出てやったら本当にそうなった。理由は２つ。家族と、恋人と、その家族が死んだからだ。本当に、偶然だった。その日にデートしていたら家族がいて、向こう側にも家族がいて・・・楽しく話して、なのにレストランでトイレに行っていた時、その場所にトラックが突っ込んできたからだ。

「ここはどこだ？」

俺はその白い空間を歩く。ああ、そうだ・・・二つ目の理由。二つ目はホント、親戚にたらいまわしにされるのが嫌になった。もともとあまり親交がない赤の他人を育てる気にはなれないからだ。

「お待ちしていましたよ・・・紅（くれない）、蓮次（れんじ）君」

目の前に俺の名前を呼ぶ女がいた。

「誰だ？」

「私は貴方が神と呼ぶ存在・・・」

「神様、か」

本当は、殴りたいな・・・俺にこんな運命を与えた神様ってやつを

「貴方を待っていました」

「・・・俺を、待っていた？」

どういうことだ？

「貴方がここに来ることは全て、生まれたときに決まっていました」

「いったいどういう・・・」

「神々の戦い・・・」

「神々の、戦い？」

「そうです。貴方達が言う神・・・それは様々な物が存在します。ギリシャ神話のような西洋の神々・・・東洋の釈迦のような神々・・・その神々が争い、気付かず下界の人々の運命を変えたとしたら？」

まさか・・・

「そうです。貴方と、そして貴方の家族・・・貴方の恋人、その家族・・・貴方達は神々の争いによって大きく運命を変えられてしまったのです」

「ざけんな！」

俺はその女に掴みかかった。

「お前らのせいで俺達の運命が狂っただと！？ふざけるのも大概にしろ！」

「ふざけてはいません・・・そして、貴方に我々は謝らなければならいのも、また事実」

「てめぇ・・・」

俺の手を払い、神と名乗る女は一つの宝玉を取りだした。

「貴方に、これを」

「これは・・・？」

白銀に光るそれを見ながら、俺は神を見る。

「貴方の運命を取り戻すチャンスを与えます」

「チャンス、だと！？」

「チャンス、という言い方はおかしいですね。可能性を提示します」

「可能性・・・」

これが、可能性？

「今から貴方に、転生する機会を与えます。その転生先の世界で貴方は神々の敗者・・・つまり、反逆者を倒してください」

「何・・・？」

「先の大戦・・・貴方達の運命を大きく変えた神『ハデス』」

ハデスって、冥界の王の名前じゃないか！？

「そして、それを促した堕天使『ルシフェル』」

「・・・・・・堕天使、だと？」

ルシフェルと言えば、大天使で有名じゃないか・・・

「この二人はさらに力を加速させ、転生先の世界を滅ぼそうとしています」

「世界を、滅ぼす・・・？」

「そうです。世界のバランスが崩れれば、この神の世界も、貴方の世界も、全ての世界が滅びてしまいます」

何故、そんな奴らに俺と・・・？

「我々神には、世界を保つ役割があります。この場から動くことはできません」

「だから俺に？」

「そうです。力は貴方に与えます。どうかお願いします」

「・・・・・・・・・」

正直、迷った。自殺してみんなのところへ行くつもりが、こんなことになるなんて・・・

「本当に、俺は運命を取り戻せるんだな？」

「はい、約束します」

「わかった、行くよ・・・俺は、俺を取り戻しに」

「ありがとう・・・」

こうして俺は、目の前が真っ白になった。

神ｓｉｄｅ

「・・・・・・・・・」

私は彼を世界に送り、宝玉を送りました。

「貴方にしては、苦渋の決断かしら？」

「・・・紫」

そこには『幻想郷』と呼ばれた世界の管理者『八雲　紫』。蓮次の世界ではゲームのキャラクターですが、彼女は実在する。彼女がそのように運命を弄ったから。

「神々への反逆者を倒すのを下界の人間にやらせるなんて・・・面白いわね」

「正直、苦しいわよ。彼は運命を変えられなければ普通に一生を過

ごせたはず・・・」

「でもそれも運命・・・ということだと思うわ」

紫は再び次元を裂いて消え始める。

「まあ、貴方が作った私のコピーたちなら、なんとかするでしょ」

「・・・そうね、私はしばらく世界の均衡を保たなければいけない。彼にもしものことがあったら、よろしくね？」

「考えておいてあげるわ・・・じゃあね」

こうして紫は消えていった。蓮次、どうか貴方に、加護があらんことを・・・

こうして、青年の運命をかけた戦いが始まる

幻想００：運命を変えられた男（後書き）

というわけで、次回は主人公の設定になります

外伝「設定資料」（前書き）

今回は設定です

最近私、ｙｅｌｌｏｗ　ｚｅｂｒａの曲にハマってます

お勧めはうっちーさんが歌う　Ｉ　Ｋｎｏｗとかですね

この前の冬コミでは東方詠却歌が素晴らしくてしょうがない。一緒に勝ったＭ－１もこの前のお笑いのＭ－１より面白いかもｗ

では設定をどうぞ！

外伝「設定資料」

主人公
紅蓮次（くれないれんじ）
年齢　生前２０歳　現在９歳
魔力ランク　ＳＳＳオーバー
髪の毛　黒（ユニゾンで変化）
目の色　青（ユニゾンで変化）
好きな物　東方ｐｒｏｊｅｃｔ　咲夜の料理
嫌いな物　理不尽

家族、恋人、恋人の家族が死んだことで世界に絶望して一度は自殺した青年。しかし神様たちの戦いで自分たちの運命が大きく変わったことを知る。
反逆者の「ハデス」と「ルシフェル」を倒すべく、別世界へと行く。
魔法少女リリカルなのはについての知識は結構うろ覚え
　小説ジャンルではチートものと部類されるものの、主人公事態に力はそんなにない。リンカーコア内容量もＢ＋であり、幻想郷とユニゾンすることで魔力ランクＥＸを得ることができる。なので主人公はみんながいないとただの人間である

デバイス（ユニゾンデバイス）
幻想郷（Ｖｅｒ紅魔郷）
東方ｐｒｏｊｅｃｔに登場するキャラ達がデバイスとして登場する。それぞれユニゾンすると姿と服が変わる。それぞれが意思を持つ本物達のコピーとして神が作り出した。大本は蓮次の体内に存在している。なのでリインフォースなどのような書が存在しない。ただこれにより蓮次自身が重傷を負うと幻想郷事態も著しく能力が低下す

る。分離も可能で、普段はその家に全員が現存して生活することができる。ただしＮＡＲＵＴＯの影分身のように魔力配分が均等となるため能力が仕えてもそのパワーは劣る

博麗霊夢：陰陽師の服
霧雨魔理沙：魔法使いの服（男性用）
ルーミア：黒いコートに黒い翼
チルノ：青い独特の服（チルノの男の服Ｖｅｒ）
紅美鈴：中国の拳法家の服
パチュリー・ノーレッジ：黒魔導士っぽい服
十六夜咲夜：執事服
レミリア・スカーレット：悪魔の翼と黒いマント（ドラキュラっぽいの）
フランドール・スカーレット：フランの翼と白いマント

神様
世界を管理する神。大戦を大きく悔やんでいる。蓮次に力を与える。

八雲　紫
コピーではなく、本物の隙間妖怪。主人公の世界にはゲームが偶然にもほぼ同じものがあるという並行世界。なので紫は存在し、蓮次を導く。

外伝「設定資料」（後書き）

次回より本編となります

幻想０１：幻想から生れし者たち（前書き）

というわけで、第一話です！

今回言うべきことは一つ

紅魔郷のｅｘｔｒａ超難しい！

え？どうでもいい？

まあ、それはさておき。今回補足をしておきますが、この作品でユニゾンデバイスの表記はあってもベルカ式ではないのでそれはご了承ください！では！

幻想０１：幻想から生れし者たち

「・・・ん」

俺は体を起こし、周囲を見た。知らない天井・・・それに、知らない部屋だ。辺りを見渡していると、扉が開いた。そこに入ってきたのは・・・

「あらご主人様、目が覚めましたか」

そこにいたのは銀髪のメイド・・・おい、ちょっと待て・・・

「十六夜、咲夜？」

俺が名前を呼ぶと、咲夜らしき少女は俺に向き直った。

「はい、貴方のメイド兼ユニゾンデバイス・・・十六夜咲夜でございます」

と、咲夜は一礼する。

「ちょ、ちょっと待て・・・メイド兼、ユニゾンデバイスだって？」

ユニゾンデバイスってどこかで聞いたな・・・確か、何かのアニメであった相棒と言うか兵器というかなんというか、そんなの

「ご主人様の記憶の中にある『魔法少女リリカルなのは』の世界のデバイスです。この世界もそうですので・・・」

魔法少女リリカルなのはだって！？

「じゃあ、この世界が・・・」

「はい、冥王「ハデス」、堕天使「ルシフェル」がいる世界です」

「なんてこった・・・」

俺は頭を抱えながらも立ち上がる。少しふらつきはあるものの、別にそこまでひどいわけじゃない。それにしても、なんだか視点が低いような気がするんだけど、気のせいかな？まあ、その前にとりあえず・・・

「咲夜・・・って呼べばいいか？」

「はい、ご主人様」

うおおっ！なんというか、ファンとしては凄くうれしいけど、同時に凄く恥ずかしい！

「あの、とりあえずご主人様はやめて。恥ずかしいから」

そういうと、咲夜は頷く。

「では、蓮次様と」

様もできればいらないんだけど・・・ま、いっか

「あーうん、そうして」

「では、食事の用意も出来ていますのでこちらへ・・・・皆も待っています」

「は？」

みんな・・・？

「やっと来たわね」

そこにいるのは赤と白の巫子服の少女

「ご飯なのだ～」

金髪で黒い服の少女

「あたいを待たせるなんていい度胸ね！」

水色の髪の毛に羽根の生えた妖精

「遅いんだぜ！」

椅子に魔女の帽子と箒のようなものを立てかけている少女

「やっと起きてくれましたか」

チャイナドレスの様な服を着ている女性

「早く座りなさい。料理が冷めちゃうから」

悪魔の翼をはやした水色の髪の少女

「ごはん！ごはん！」

金髪で同じく翼をはやした少女

「早く食べて本を読みたいの、早くして」

そして、紫色の髪に、分厚い本を読んでいる女性。つまり、そこにいたのは博麗霊夢、霧雨魔理沙、ルーミア、？・・・じゃなかった、チルノ、紅美鈴、レミリア・スカーレット、フランドール・スカーレット、パチュリー・ノーレッジだった。

「これって・・・」

「全員、神様が生み出した存在ですが、私と同じくユニゾンデバイスです」

神様に、生み出された・・・？

「ほら、早く！」

俺はフランドールに引っ張られ、席に座る。どうやら相当お腹がすいているようだ。あれ？フランドールってこんな性格していたっけ？

「いっただきまーす！」

こうして食事が始まる。良くわからないことだらけだ。料理はどうやら咲夜の作ったものらしく、非常においしくできている。初めて食べた。確か資料にも料理はかなりできるって見たような気がする。

「いったいどういうことなんだ？」

俺は隣に立っている咲夜に話しかける。

「簡単に説明しますと、私達９人は神が作り出した９人で１人のユニゾンデバイスです。普段はこのように分裂出来ますが、場合によっては一つとなり、戦闘で切り変えてユニゾンが可能となっています。分裂するとその分力も落ちてしまうのでそれをお忘れなくお願いいたします。」

「な、なるほど・・・」

とりあえずよくわかんないけど、９人で一人なんだな・・・てか、大妖精と小悪魔はいないのかな？名前がないからか？

「咲夜―！おかわりー！」

フランが元気よく皿を上げる。良く食うなぁ・・・

「はい、フランお嬢様」

咲夜が頷き、皿を受け取る。しっかし・・・紅魔卿シリーズのキャラたちがここにいるのはどうしてだ？

「それは簡単・・・貴方が東方ｐｒｏｊｅｃｔの中毒者だから」

パチュリーが静かに俺に言う。え？

「は？」

「知ってる力、知ってる効果・・・その方が貴方も都合がいいでしょ？神様が貴方の記憶をさかのぼり、力として強力な物を与えた。それが私達というわけ」

「な、なるほど・・・」

パチュリーに言われると説得力あるな・・・

「まあ、当分その体じゃ不便だからサポートはするぜ！」

その体って・・・え？

「体、小さくなってる！？」

魔理沙に言われて初めて気がついた。俺の体が縮んでいる。

「気がつかなかったの？呆れた・・・」

霊夢がため息をつき、お茶を飲んでいる。

「恐らくですが、この年代は魔法少女リリカルなのはの年代だからではないでしょうか？」

「というと？」

咲夜がメモ帳らしきものを取りだした。

「世界の崩壊とは、そのシナリオの崩壊を意味していると神のデータにはあります」

神のデータって・・・そんなものあるんだ。便利だな。

「つまり、この世界での最悪の終わり方・・・それを防ぐのが、蓮次様の役割だと考えてよろしいでしょう」

それが、俺が自分の運命を取り戻す方法なら、やっぱりやるっきゃないな・・・

「・・・わかった、みんな頼むよ」

こうして紅魔卿の面々との『魔法少女リリカルなのは』の世界での生活が始まった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「やあ、ハデス」

「・・・どうした」

そこはどこかの場所。そこには二人の男がいた。一人は大柄な男。もう一人は普通の２０台から３０代くらいの男だろう。

「天界が動き出したみたいだ。どうする？」

男の問いに、大柄な男は鼻で笑った。

「世界の崩壊に向けて我々は動き出す・・・その程度問題ではない」

「貴方がそういうなら従おう」

男はそれを聞いて小さく笑っていた。世界を崩壊させようとする者

達も静かに動き出そうとしていた。

幻想０１：幻想から生れし者たち（後書き）

蓮次「とりあえず、第一話！」

秋風「はい、というわけで主人公の活躍をよろしく！」

蓮次「そしてこのコーナーの名前も募集しています！」

秋風「是非応募してくださいね！」

蓮次「次回、幻想０２：それぞれとの出会い」

秋風「次回もよろしく！」

幻想０２：それぞれとの出会い（前書き）

というわけで連続投稿です。てか、連続で貯めてるのでｗ

ではどうぞ！

幻想０２：それぞれとの出会い

蓮次ｓｉｄｅ

次の日の朝、いつも起きているよりも早く目が覚めた。前世ではいつも遅く起きていたのに・・・

「んにゅ・・・」

「ん？」

布団をめくると、そこにはフランドールの姿があった。

「フランドール、どうしてここにいるんだか・・・」

ちゃんと部屋で寝かせたのに・・・

「フラン、朝だよ、フラン」

「やぁ～・・・朝嫌い～・・・」

そう言えばレミリアもフランドールも吸血鬼だよな・・・朝が弱いのはいいけど・・・

「咲夜の朝ごはんなくなるよ？」

「それはもっとやだ！」

と、フランが飛び起きた。

「おはようフラン」

「うん！蓮次！」

フランは笑みを見せて、着替えに外へ出て行った。咲夜曰く、フランはレミリアと仲を取り戻したところから記憶のコピーが行われているらしい。つまり、紅魔卿の話が終わってからということになる。

「俺も起きるかぁ・・・」

学校の制服、聖祥小学校の制服だ。

「ハァ・・・」

この世界で俺のついてないところと言えばこの原作を良く知らないという点だ。魔法少女リリカルなのはについては表面上で3作がアニメ、2作が漫画であることしか知らない。内容もどのようなものかを全て知っているわけではない。それと言うのも、アニメを見てから随分たっているので記憶があいまいになっているのだ。

「ま、なんとかなるか・・・」

リビングに行くと、みんな食事を食べている。レミリアはいないところを見ると、寝ていないようだ。パチュリーは食事を終えて、眠そうに本を読んでいる。

「みんなおはよう」

「おはようございます、蓮次様」

「おはよう蓮次」

「おはようだぜ蓮次」

「おはようございます、蓮次さん」

「・・・おはよう」

上から咲夜、霊夢、魔理沙、美鈴、パチュリーだ。俺とフランは席について食事をする。

「レミリア達は？」

「お嬢様はまだ寝ています。極端に朝に弱い方なので。ついでに言うと、チルノとルーミアは夜更かしのせいで爆睡していて起こすのを諦めました。」

「やっぱり・・・？」

食事をしながら、静かに言う。咲夜は咲夜で忙しそうに食器などを片づけている。

「ああ、蓮次？」

「何？パチュリー」

本を置き、パチュリーが一冊のメモ帳を置いた。

「これは？」

「この世界の時系列その他諸々・・・管理局の存在と、ハデスが利用しそうな闇を検索したわ」

「ありがとうパチュリー、さすがは『動かない大図書館』かな？」

俺が言うと、パチュリーは再び本を読み始める。

「それほどでもないわ・・・後は自分でなんとかしてね」

「うん」

「さて、蓮次様・・・そろそろ学校へ行く時間です。編入手続きは神が取り繕ったそうですので、行きましょうか」

すると6人が光る。そして一つに集合して手のひらサイズの咲夜が俺の肩に乗った。

「今日は私がお世話を致しますので」

「うん、よろしく咲夜・・・でも、レミリアやルーミア達は？」

「集合体になるとそれぞれ部屋に分けられます。おそらく、フランお嬢様と一緒におられます」

――デバイス構造内　フランドール　レミリアの部屋

「お姉さま～起きて～」

「もうちょっと寝かせて・・・」

――ルーミア　チルノの部屋

「ぐー」

「ｚｚｚｚ・・・」

「なら大丈夫かな。行こう」

こうして俺は学校へ行くこととなった。

学校へ到着して人目のつかない所へ行くと、咲夜がいきなり頭身サイズになった。

「咲夜？」

「編入するときは保護者がいなくてはなりませんので・・・代役です」

「な、なるほど・・・」

こうして、咲夜と一緒に校舎の中に入っていった。

――職員室

現在職員室で担任の先生に挨拶をしている。

「初めまして、紅蓮次君」

「はい、先生」

「そして貴女が・・・・」

「十六夜咲夜・・・蓮次様のお世話をしております」

咲夜が一礼して挨拶をする。

「その、ご両親は・・・・」

「旦那様と奥様は海外にて仕事をしておりまして・・・帰ってくるのは数年に一度・・・なので私が代わりに来た次第です」

「そうですか・・・では、蓮次君はクラスに行きますので、十六夜さんは学校の説明を聞いてください」

「わかりました（では蓮次様、終わり次第屋上で待機致します。お弁当も屋上で）」

「（わかった）」

昨日のうちに教わった「念話」を使い、咲夜と別れて教室に行くことにした。

教室

「では、今日から一緒に勉強する新しい友達を紹介します」

「紅蓮次です」

「えーと、何かみんなに言っておくこととかあるかな？」

と、先生が俺に聞いてくる。

「いえ、特にないです」

「じゃあそうだね・・・紅君はあの真ん中の空いている席に座って？」

「はい」

言われるがまま席に着く。するとそこには茶髪にツインテールの少女がいた。

「私高町なのはっていうの。よろしくね！」

「・・・ああ、よろしく」

まさか、主人公と同じクラスとはな・・・ま、いっか。こうしてホームルームが終わり、生徒が一斉に俺のところへ来た。当然ながら質問攻めである。前はどこにいたのか？どこにすんでいるのか？得意なスポーツは何か？その他諸々である。

「ほらほら、転校生困ってるじゃない。質問は順番に！」

と、学級委員らしき少女が他の生徒をなだめる。金髪にこの釘宮ボイス・・・確か、アリサ・バニングスだっけか。

「ふぅ・・・」

「あんた、大丈夫？」

「あ、うん・・・なんとかね。ありがとう、助かったよ」

お礼を言うと、アリサはそっぽを向く。

「べ、別にアンタのためじゃないわ」

・・・リアルツンデレ、初めて聞いた。こうして午前の授業は終了。俺は屋上に向かう。するとそこにはすでに、咲夜が料理を揃えて待っていた。

「お疲れ様です、蓮次様」

「うん、ありがとう咲夜・・・それより聞いていい？」

「はい？なんでしょう」

「この料理、どうやって用意したの？」

そこには色々と料理が並んでいる。

「メイドの秘密です」

「あ、そ・・・」

大方、ザ・ワールドでも使って用意したんだろうな・・・

「さあ蓮次様、冷めないうちにどうぞ」

「わかった。でも、みんなは？」

「大丈夫です。後で食べてもらいます」

そう言われ、俺は食事を食べる。咲夜って本当に料理が上手だな・・・

「たくさん食べてくださいね」

「ああ」

こうして、おいしい食事を俺は味わった。

放課後

「ふう、疲れた・・・」

「お疲れ様です、蓮次様」

現在、帰り道を歩く。咲夜は当然ながら小さいサイズである。

「そういえば咲夜」

「なんです？蓮次様」

「この年月の話って、なんかロストロギアが鍵なんだよな」
確かジュエルシード・・・だっけ？
「はい、ジュエルシードと呼ばれる古代遺失物ですね。それが、どうかしました？」
「いや、もし俺がそれ先回りして集めちゃえば、その事件は起こらないじゃん」
「確かにそうですね。いい案です、蓮次様」
でもなぁ・・・
「どうやって探せばいいかな？」
「それなら、私達には古代遺失物の探知が容易くできます」
「じゃあ簡単だな、さっそく頼むよ」
「はい」
こうして咲夜が静かに目を閉じる。それから少しして
「見つけました」
「ホント？」
「はい・・・一つはこの付近の広場。おそらく公園でしょう。そし

てここから先の海・・・その中にかなりありますね」

なるほどー・・・

「じゃあさ、公園に行ってみようか」

「はい、蓮次様」

こうして、俺と咲夜は公園に向かうことにした。

海鳴　第3公園

「えーと、どの辺？」

「はい、あそこの草むらです」

「そっか」

歩いて近づき、周囲を探す。すると青緑に光る宝石を見つけた。

「あった！」

「では封印します」

「ああ、お願い」

そういうと、咲夜が霊夢に切り替わった。

「霊夢？」

「封印は私の分野よ」

「そっか」

こうして霊夢が封印に取りかかる。

「ジュエルシード、封印」

光が辺りを包み、ジュエルシードは静かに輝きを失った。

「これでいいはずよ」

「ありがとう霊夢」

「どういたしまして、貸しにしておくわ」

・・・嫌なユニゾンデバイスだな、お前

「さて、帰ろうか」

「そうね・・・っ！蓮次、下がって！」

突然、上空から何かが飛んでくる。俺はそれを避けられず。吹っ飛ばされる。

「うあっ！」

「蓮次！」

霊夢がアウトフレームになり、俺を抱える。

「大丈夫？」

「あ、ああ・・・なんか神様は俺に耐久は上げてくれたみたいだ」

とりあえず、助かった。でも、いったいなんだ・・・？

「あれよ、蓮次」

「え？」

その上には、現在の俺の体の年齢と同じくらいの金髪の少女と、オレンジ髪の女性がいた。

「君は・・・」

「・・・・・・」

あれって確か・・・

「蓮次！来るわよ！」

オレンジ色の髪の女性が突っ込んでくる。

「わっ！」

下がると、霊夢が再び咲夜に切り替わる。

「ねえ坊や、なかなか面白い魔法を使うみたいだけど・・・それは

どうでもいいんだ。その石、よこしな」

「名前も名乗らず、いきなり襲ってくる人に上げると思う？」

まさか、こんなに早く接触するなんて思わなかった。

「だってさフェイト、どうする？」

「・・・アルフ、待って」

金髪の少女が降りてくる。

「私はフェイト・テスタロッサ・・・訳があってそれを集めてます。それを渡してください。そうすればこれ以上危害は加えません」

「あのね、そういうことは先に言うべきでしょ」

まったく、礼儀ってもんがなってねぇ・・・親の顔が見てみたいわ

「・・・それは謝ります。だから、それを渡してください」

少し焦りが見えるフェイト。だけどここで渡すと俺のプランが台無しになる。

「悪いけど、これは渡せない。君に譲れない理由があるように、俺にも譲れない理由があるから」

「そうですか・・・」

そう言いながらフェイトがデバイスを構える。

「なら、力づくでも」

「蓮次様、ユニゾンしましょう」

「あ、ああ・・・でも、大丈夫かな」

「大丈夫ですよ。行きましょう」

「「ユニゾン・イン！」」

俺と咲夜は光に包まれ、一つになる。

『どうですか？』

「・・・あのさ、一つ聞いていい？」

『何でしょう？』

「なんで俺、執事服（バトラー）なの？」

そう、俺の恰好は１５歳くらいに成長しているし、しかも執事服だ。

すると、俺の手に８本のナイフが指の間に挟まった。

「なるほど・・・」

これなら、戦えるのかな？

「変な魔法だね！そらっ！」

アルフが拳を繰り出す。だが・・・

（見える・・・！）

俺はそれを避け、空中で回転して着地してナイフを投げる。

「はっ！」

「ふっ！」

しかしアルフはそれを見切り、避けた。

「なかなかやるじゃないか。さっきの攻撃を避けられなかったのが不思議だよ」

たしかに・・・

『それは、私とユニゾンしたからです。身体能力は上がりますから』

なるほどね・・・

「アルフ、下がって」

「フェイト・・・」

「私がやるから」

すると、フェイトの回りに金色の矢が浮かぶ。

「ファイア！」

一斉にそれが俺に向かってくる。

『蓮次様！スペルカードを！』

「よしっ・・・！」

俺がナイフを投げる。そしてそれは無数に増えるように相手に見える。

「奇術――ミスディレクション」

「なっ！？」

「行けっ！」

実際には魔力で作り出したナイフを幾重にも重ねて投げているのだ。そしてそのナイフはフェイトの放った矢を消し、そのままフェイトに向かって行く。

「っく！」

ナイフはフェイトに刺さる前に、魔法障壁ができる。

『ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

男性の声と共に、フェイトへ向かったナイフはそれに刺さった。

「フェイト！？」

「退くよ、アルフ・・・」

「でもジュエルシードは・・・・！」

「今の私じゃ無理・・・立てなおすよ」

こうして、フェイトとアルフは飛んで消えていった。

「はぁ・・・」

戦闘が終わってから、俺は地面にへたり込んだ。するとユニゾンが解けて元の姿へと戻った。

「大丈夫ですか？蓮次様」

「うん、咲夜・・・何しろ、戦いが初めてだったから」

「そうですね・・・初めてにしては、とても良いと思います」

「ありがと」

なんとか立ち上がると、俺は手のひらにあったジュエルシードを見つめる。

「そういえば咲夜、ジュエルシードっていくつあったっけ？」

「確か１２個のはずです」

「そっか・・・じゃあこれが、第一歩、だね」

俺は夕日の光に照らされるジュエルシードを見つめることにした。

幻想０２：それぞれとの出会い（後書き）

蓮次「ということで初ユニゾンでした」

秋風「どうだった？」

蓮次「成長したり縮んだり・・・コ○ンか！」

秋風「まあしょうがないよ」

蓮次「次回、幻想０３：Ｎａｍｅ」

咲夜「次回もお楽しみくださいませ」

幻想０３：Ｎａｍｅ（前書き）

というわけで今回結構話がひどい話です。
個人的に過去の出来事ともちょっと似てるので。まあ、私はすごい解決方法でしたけど

ではどうぞｗ

幻想０３：Ｎａｍｅ

ジュエルシードを封印してから次の日、学校に登校する。今日はフランが俺の方にいる。なんでも、阻害認識魔法を使って見えなくしているので肩に乗っても平気なのだ。

「えへへ、蓮次お兄ちゃんと一緒〜」

「でもフラン、どうして外に？」

「うん、昨日またチルノたち夜更かしで、お姉さまもまだ寝てるから」

どうやら退屈だからということだ

「あの、フラン？お願いだからむやみやたらに暴れたり、飛びまわったりしないでね？」

「あはは、そのセリフもう3回聞いたよ。大丈夫だって」

うん、本人はそう言ってるけどすごく心配だ。何しろフランは紅魔郷のメンツの中で一番強力であり一番怖くて可愛くて、そして少し気がふれている。なのでいつ暴れて人を殺めてしまうのではないかとハラハラしている。

「〜♪」

そして本人は俺の心配を余所に楽しそうに鼻歌を歌い、笑顔である。

「はぁ・・・」

ジュエルシード、こんなので封印大丈夫なのか？

「咲夜はそれでヘーキって言ってた」

「あ、そ」

ジュエルシードは俺の腰のポーチに入っている。これには何十にもプロテクトがかかっており、ちょっとやそっとじゃ反応もさせないし、暴走して発動することもあり得ないそうだ。

「パチェの自信作だって」

「流石、大図書館」

パチュリーは何故か知らないけど、魔導系の本を読み漁って色々なことをしてくれる。今は待機部屋の中でデバイスを作っているらしい。

「お兄ちゃん私達がいないと弱いからね」

「あはは、そうだね」

俺の魔力ランクはこの世界では潜在こそＳＳＳオーバーとして設定されているものの、それはデバイスの補助がないと発動もできなければそれを開花させることも不可能。しかも現在は覚醒してないからＢ＋そこそこらしい。この前の戦闘だって咲夜たちがいなかったら確実に負けてたし。

「はぁ・・・それにしても、反応ってなかなかないもんだね」

「そうだね～」

学校を別にサボってもいいんだけど、なのはの近くにいたほうがジュエルシードなどの探査もすごく楽になる。

「あっ！紅君だ！」

後ろから声がした。この田村ゆかりボイスは・・・

「高町さん」

そう、なのはである。

「おはよう、紅君」

「おはよう、高町さん」

「紅君って朝はこの通学路なんだね」

「まあね、家はこの辺だし」

これは知らなかったな・・・まあ、そういうのはあんまりアニメでも描写にないし

「そういえば紅君、私のことはなのはでいいよ？みんなそう呼ぶし」

・・・そうか？見た限り呼んでるのってアリサとすずかしかいなかったような。ま、いっか

「じゃあ、なのは」

「うん！」

嬉しそうになのはが笑う。

「じゃあ俺も蓮次でいいよ。その方が呼びやすいだろうし」

「うん、蓮次君」

こんな感じで学校に向かって行く。蓮次って、咲夜たち以外から呼ばれたの・・・久しぶりだな

――大好きだよ、蓮次！

「・・・っ！」

「れ、蓮次君？どうしたの？」

「い、いや・・・なんでもない。遅刻しそうだし、少し急ごうか」

「でも、顔が真っ青なの」

そ、そんなにか・・・

「ううん、大丈夫だよ」

こうして、俺は学校へ向かう。早く、早く運命を取り戻すんだ・・・

待ってろよ、愛梨！

学校

「おはよー」

「おはよー」

「おはよう」

なのはが教室に入り、その後に俺が続く。席の近くにはアリサとすずかがいた。

「おはようなのは」

「おはよう、なのはちゃん」

「うん、おはよう、アリサちゃん、すずかちゃん」

笑顔でなのはが答える。俺はそのまま席に座る。

「おはよう、紅君」

「ん、おはよう」

すると、気に懸けてくれたのか、すずかが挨拶をしてくれる。アリサはもうなのはと昨日のテレビについて話すのが夢中らしい。

「今日はなのはちゃんと来たの？」

「ああ、たまたま道が一緒だったから」

「そうなんだ」

そんな話をしてると、周囲の男子から驚きの声が上がっている。やっぱり人気あるんだな、こいつ。さて、今日も一日頑張りますか

「（フラン、バッグで寝てても・・・）」

「ＺＺＺ・・・」

既にぐっすりだった。

いつもどおりに授業が終わり、教科書をバッグにしまう。すると、数人の男子生徒が俺のところに来た。

「おい！紅！」

「・・・えーと、何？」

明らかに面倒くさい事態に巻き込まれそうだ。

「高町さんはな、このクラスでもかなりの評判なんだぞ！」

「ああ、そうなんだ」

「だからお前みたいな転校生が一緒に学校に来ていいわけがない」

知るかぁぁ！だから小学生って困る！言ってることがわけわからん！

「いや、なのはにそう言われるなら分かるけど、君たちに言われる筋合いは・・・」

「お前！高町さんの名前を気安く名前で・・・！」

やっぱりみんながみんななのはって呼んでないじゃん

「いや、本人にそう呼べって言われたし・・・」

「嘘つけっ！」

男子生徒が俺の胸倉を掴む。クラスもざわつき始める。どうしたもんかな・・・軽く捻ってやってもいいんだけど、それやったらやったらでまた面倒だしなぁ・・・

「ちょっとアンタ達！何してるのよ！」

教室内にアリサの声が響きわたる。どうやら3人がトイレから戻ってきたらしい。

「っち！」

「待ちなさいよ！紅が何をしたのよ！」

しかし男子生徒はそれに答えず席に座る。

「いや、大丈夫だよ、バニングスさん」

俺はアリサをなだめ、席に座る。なのははなのはで心配そうに俺の

ことを見ていた。

次の日から、面倒な事態に巻き込まれた。

「はぁ・・・」

下駄箱

『死ね』

『彼女に近づくな』

『バカ』

『学校に来るな』

上履きにまで書かれてるし

机

以下同文

ロッカー

以下同文

「ひどい・・・」

なのはが呟く。俗に言うイジメである。昨日の男子生徒と数人の男

子生徒がニヤニヤとこちらを見ていた。

「あいつらぁ～！」

バニングスが動こうとする。

「バニングスさん」

「何よ！」

「俺は大丈夫だから」

そう言って宥めるが、バニングスは聞く耳を持たない。

「あいつらがやったの明白じゃない！」

「でも、物的証拠もないし、きっとすぐに逃げるよ。それに、君まで対象になったら困るだろ？」

「けど・・・」

と、まだ納得できていない様子

「ああいう奴らには、そのうち天罰が下るから」

担任にも心配されたが、そのうちなくなると納得させた

その次の日

下駄箱

扉が破壊されてる。上履き消失

机

中に入った教科書が灰になる

ロッカー

体育着がボロボロの上、泥だらけ

「蓮次君・・・」

「あはは、そろそろまずいかな」

とりあえず策は咲夜に任せたし、大丈夫だろ。

―昼休み―

「ねえ蓮次君、大丈夫？」

「平気だよ」

「でも・・・」

ピンポンパンポーン

『今日はいつものお昼の放送を中止して、映像を見てもらいます。全生徒はテレビに注目してください』

テレビが付き、映像がうつされる。そこに映っていたのは・・・

『徹底的にやろうぜ！』

『おっしゃ、任せろ！』

『ざまあ見ろ紅！』

それは俺に掴みかかってきた男子生徒と8人ほどの別クラスの男子生徒達が俺の机やロッカーを破壊したりするシーンだった。男子生徒の顔がみるみる青くなっていく。そして、すごい勢いで担任の先生が入ってきた。

「〇〇君！すぐに職員室に来なさい！」

「ほらね？天罰が下った」

こうして、この一件は幕を閉じることとなる。

「（サンキュー、咲夜）」

「（いえ・・・それより、新しい体育着などを買わなければいけませんね）」

「（そだね）」

この日の放課後、その主犯と共犯の生徒たちの両親が駆けつけ、俺と咲夜に謝罪した。それぞれ親は会社の重役や社長などで、かなり謝られた。とりあえず今までの下駄箱、ロッカー、教科書、体育着、机、椅子、上履きなどなど、破壊されたものを弁償してもらった。以後、その生徒たちは転校するらしい。そして現在、俺と咲夜が歩いている。

「大変でしたね」

仕掛けは簡単。昨日のうちにみんなが帰った後監視カメラをしかけただけ。ちょっと高かったけど、まあいいかな。

「まあ、原因はほとんど俺なんだけどねぇ・・・」

「あ！蓮次君！」

下駄箱にはなのはがいた。

「あれ？なのは・・・まだ残ってたの？」

「うん・・・あれ、その人は？」

と、咲夜を見る。

「十六夜咲夜、蓮次様のメイド兼お世話役です。初めまして」

そう言って咲夜が一礼する。

「た、高町なのはです、初めまして」

「それで、どうしたの？こんな遅くまで」

「あ、うん・・・蓮次君をその、待ってたの」

「え？」

「あのね、うちはお父さんとお母さんが喫茶店を営業してるから、うちのケーキ食べて元気出してもらおうと思って」

と、なのはが言う。担任の話では、なのはにも少しだけ俺がいじめにあった理由を話しているらしい。ちょっと罪の意識があるのかな？

「わかった、行くよ」

「一応、私も同行してもよろしいでしょうか？」

「あ、はい！」

こうして、俺と咲夜は高町家の営業する「翠屋」へと行くことになった。

幻想０３：Ｎａｍｅ（後書き）

秋風「というわけで！３話！」

蓮次「どうでもいいけど、イジメ話ってどうよ」

秋風「いや、昔から思うんだけど、アリサがいじめっ子って設定があっても他はないじゃん」

蓮次「まあ、確かに」

秋風「だからおもしろそうだったので」

蓮次「まあ、読者のみんなは間違ってもやらないと信じてるよ」

秋風「だね」

蓮次「次回、幻想０４：Ｇｒｅｅｎ　Ｃａｆ？」

フラン「ジカイモミテネ？」

幻想０４：Ｇｒｅｅｎ　Ｃａｆ？（前書き）

というわけで第４話！どうぞ！

幻想04：Ｇｒｅｅｎ　Ｃａｆ？

なのはに誘われ、俺は翠屋に向かうことになる。翠屋と言えば、なのはの両親が経営する喫茶店だ。ぶっちゃけ甘いものは嫌いではないが、好きでもない。でもこの世界で大きく関わりを持つ以上、この店へ行くことは避けて通れない。現在通学路をなのはと歩く。咲夜は後ろからついてくる形である。

「蓮次君、蓮次君」

「・・・え？」

「もう、さっきから何回も呼びかけてたのに」

「あ、ごめん・・・なに？なのは」

どうやら、随分と考え込んでいたようだ。

「あのね？こんな遅くに呼んじゃったけど、お家の人は心配しないかな？」

「ああ、うちは基本親が家にいないし、咲夜もいるから大丈夫だよ」

「メイドさんかぁ、すごいよね」

「ああ、そうだね」

何がすごいんだっけ・・・えーと・・・ああ、そうか。なのはの家は普通の家庭なんだよな。あそこの学校は基本お金持ちとかしか行

かない学校だものな。

「あ、もうすぐ着くよ！」

学校から随分歩いたが、そこに翠屋と書かれた看板がある店を見つける。なるほど、あそこが噂の翠屋か・・・

「ここが翠屋？」

「うん！ただいまー！」

と、なのはが扉を開ける。

「あら、なのはお帰り」

お店には夕方だからか、もう数人しかお客はいなかった。だがケーキの減り具合を見ても随分とお客さんは入っているようである。目の前には２０代くらいの女性がいた。この人は確か・・・桃子さんだっけ？

「あらなのは、その子が？」

「うん！蓮次君だよ！」

「紅蓮次です。後ろにいるのが・・・」

そう言って頭を下げ、咲夜も前に出る。

「十六夜咲夜、蓮次様のメイドです」

「あらあらご丁寧に。高町桃子、なのはの母です。大変だったわね」
と、頭を撫でてくれる。どうやらなのはが俺についての事情を話したらしい。
「あなたー！蓮次君が来たわよー」
桃子さんが言うと、厨房らしき場所から若い男性が出てくる。
「やあ、君が蓮次君か。高町士郎、なのはの父だ。よろしくな」
「あ、はい。紅蓮次です。こっちはうちのメイドの十六夜咲夜」
「初めまして」
そのまま席へと勧められ、目の前にケーキがおかれた。
「さあ、たんと食べなさい」
「あ、どうも・・・」
目の前にいくつかおいしそうなケーキが並んでいる。普通ひとつとかじゃね？
「好きなだけ食べるといい、奢るから」
「でも、咲夜の分まで・・・」
「なのはから聞いたことの後だ、元気を出して欲しいからね」

と、士郎が笑う。どうやらこの家族はとことんお人好しらしい。

「ありがとうございます」

まあ、無理に断る理由もないのでケーキは美味しくいただくことにした。おいしいケーキと紅茶を頂いて、一息つく。咲夜にも念話でこの時くらいゆっくりするようにと促しておいた。

「そういえば蓮次君、ご両親は何をしているんだい？」

「え？ああ、えっと・・・」

確か、この世界では前の家族のことを設定として織り交ぜたんだったな。

「父は海外で外国金融について仕事をしています。母も同様です」

「そうなの。じゃああなたは一人で？」

「あ、いえ・・・咲夜もいますし、姉や妹もいますので」

一応、霊夢、魔理沙、美鈴、パチュリー、レミリア、フラン、ルーミア、チルノのことである。

「兄弟がいるのかい」

「ええ、黒一点です」

なんだかよくわからないけど、この二人は質問を集中砲火してくる。なんでだ？

「（蓮次様）」

「（ん？何、咲夜）」

「（フランお嬢様がそろそろ限界の様ですので、ケーキを買って帰ることにしましょう）」

確かに、このケーキの山を見たらそうなるか・・・

「（わかった、帰ろう）」

俺は静かに立ち上がる。

「すいません、そろそろ姉達も待ってますので」

「ああ、もうこんな時間か。また遊びにおいで」

「じゃあ蓮次君！また明日なの！」

「うん、また明日・・・あ、すいません。ケーキを１０個ほど適当に包んでもらえますか？」

咲夜がケーキを選び、お金を払って店の外へ出る。

「じゃあ、失礼します」

こうして、俺は翠屋を後にすることにした。

自宅

「蓮次お兄ちゃん！ケーキ！ケーキ！」

アウトフレームになったフランが騒ぐ。

「駄目ですよお嬢様、夕食が先です」

そう言いながら咲夜と美鈴が料理や食器を並べていく。

「フラン、食べたいのは分かるけど後で食べよう？ケーキは逃げないから」

「は～い」

こうして静かに食事を始める。すると、美鈴が俺に声をかける。

「そういえば蓮次さん」

「何？美鈴」

「なのはさんのご両親、ただものではないようでしたね」

え？なんで？

「お父さんの方に関しては微妙に殺気を込めてましたよ？」

「本当に？」

「ええ、かなりの武術の達人に見えました」

そういえばなのはの家は家に道場があった気がするな。

「お母さんに限ってはいつも目を見て話してましたし・・・まるで、蓮次さんの心を見たいように」

「・・・あんまり深いことを聞いてくることはないと思うけど」

「そうですね。敵対することはないでしょう」

そんな会話の後、無事に夕食を終えてケーキを食べることにした。

「おいしい！」

フラン、ルーミア、チルノはショートケーキ。霊夢はフルーツタルトで、魔理沙はモンブラン、美鈴はチーズケーキ、レミリアとパチュリー、咲夜はチョコレートケーキを食べる。俺はさっき食べたからいいと断った。

「さて、俺も寝るかな・・・」

明日も、平和であるように・・・と

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

そこはファミレスだ。家族や友人、恋人が賑わい、食事を楽しむ場所

「それにしても、蓮次君は学校はどうなんだい？」

「はい、楽しく学んでいます」

今食事をするのは6人。蓮次とその両親、そして恋人とその両親だ。

「ねえ蓮次、この後一緒に買い物行こう？」

小さな声で、女性は蓮次に呼びかける。

「わかった、いいよ」

「やった」

嬉しそうに女性は笑う。

「・・・っと、すいません、ちょっと失礼」

そう言って蓮次はトイレへ向かう。そして用を足して戻ってくるその瞬間だった。

――ドオォォォン！

「きゃあああああああああ！？」

店内に悲鳴が響きわたる。その席には5人いた。蓮次を除いた5人が。そして蓮次は女性の元へ駆け寄る

「しっかりしろ！おい！」

「あ・・・蓮、次・・・」

「しっかりしろ！」

「いたい、よ・・・いた、い・・・助けて・・・れん、じ・・・」

そう言って、女性は息絶える

「うあ・・・嘘、だ・・・こんなの・・・こんなの嘘だ・・・嘘・・・なんだ・・・う、うあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！

「凄い汗です・・・」

「大丈夫、だから」

俺は息を整えながら咲夜を見る。しかし、咲夜はその場を離れてくれない。

「そうとは思えません。蓮次様、ゆっくり深呼吸をしてください」

「う、うん・・・」

「汗をふきましょう」

言いながら咲夜は汗を拭いてくれる。

「あまり無理をなさらないでくださいね」

「うん・・・ありがとう咲夜」

咲夜は優しく微笑んでいた。

それからしばらくして、俺はいつもどおりに学校へ登校した。本当にいつも通りである。すると、なのはが近づいてくる。

「おはよう！蓮次君！」

「うん、おはようなのは」

言いながら席に座る。

「あのね、蓮次君。明日と明後日のお休み、暇かな？」

「明日と明後日？うん、暇だけど・・・」

「よかったら、一緒に温泉に行かない？」

突然の誘いである。数人の男子生徒からの殺気を受けながらも、俺は考える。確かこの温泉に行くのって・・・

「（そうよ、この時ジュエルシードが一つ回収できるわ）」

と、パチュリーが念話で伝えてくる。

「（そうだよね・・・ならやっぱり行くべきかな？）」

「（ジュエルシードを回収したいなら、そうするべきね）」

「うん、大丈夫だよ。一応咲夜が行くけど、いい？」

「うん、全然平気だよ！」

こうして温泉に行くことになった俺だが、なのはが異様に嬉しそうだったのはなぜなのだろうか？そう思った。

幻想０４：Ｇｒｅｅｎ　Ｃａｆ？（後書き）

秋風「というわけで第４話」

蓮次「どうでもいいけどペース早いね」

秋風「そうだね。もう満身創痍だよ」

蓮次「寝ろ」

秋風「はい」

蓮次「次回、幻想０５：温泉」

魔理沙「次回も見ろよ！マスター・・・スパーク！」

幻想０５：温泉（前書き）

というわけで温泉の話です。多分ここからがユーノ君初登場かもｗ

幻想０５：温泉

朝、８時・・・体起こすと、いつも通りにフランがベッドの中で丸くなっていた。

「フラン、朝だよ？」

「あい～・・・」

眠そうな体を起こした。そういえば今日、温泉に行くんだっけ・・・

「フラン、準備は大丈夫？」

「うん！ばっちり」

じゃあ朝食を食べて集合場所の翠屋に向かうか・・・

「おはようみんな」

「おはようございます、蓮次様」

既にみんなは準備万端らしい。レミリアも眠そうだ。ルーミアとチルノは寝ている。

「蓮次様、今日のプランですが・・・」

「うん、どうしたの？」

「一応、同行するのは全員と言うことですが、大丈夫でしょうか？」

そう、「良かったらお姉さん達も呼んでね」と言われている。まあ、一応ＯＫを出してしまった俺も俺なのだが、多分大丈夫だと信じたい。

「じゃあ行こうか」

こうして俺達は翠屋に向かった。

翠屋前

「おはようございます」

「おはようなの！蓮次君！」

笑顔を見せるなのは。すごくいっぱいいるなぁ・・・

「アンタも来ることになったのね」

「あ、うん・・・よろしくね、バニングスさん、月村さん」

「それで、後ろの人達が？」

「うん、俺の姉と妹です」

そういうと、みんなが前に出る。

「霊夢よ」

「魔理沙だぜ」
「美鈴です」
「フランドールだよ！フランて呼んでね！」
「レミリアよ」
「パチュリー・・・」
「あたいはチルノ！」
「ルーミアなのだ～」
・・・・・大丈夫かな、これ
「な、なんだか随分すごい姉妹ね」
「よ、よく言われる」
実際血は繋がってないしな。
「で、こっちが・・・」
「十六夜咲夜と申します。蓮次様たちのお世話をしています」
「よろしく。じゃあうちの紹介しよう。僕はなのはの父の士郎」
「母の桃子です」

「兄の恭也です」
「姉の美由希です」
と、高町ファミリーが挨拶してくれる。
「月村すずかです」
「姉の忍です」
「アリサ・バニングスよ」
こうして自己紹介を終え、俺達は温泉へ向かうことになった。
車に乗り込むと、フランが俺の膝の上に乗った。
「あたしここ～」
「フラン、危ないよ？」
「平気平気♪」
とご機嫌のフランドール
「じゃあ隣、いいかな？」
と、なのはが隣に座る。
「では、私は蓮次様の隣で」

咲夜が俺の隣に座る。他のメンバーは他のメンバーで椅子に座る。
3台ほどのワゴンで行くため、なんの問題もなかった。

「そういえば蓮次君、フランちゃんとレミリアちゃんて外国の人の名前？」

「あ～・・・うん、母さんがその、イギリス人だからさ」

超嘘である。こうでもしないと『紅レミリア』『紅フランドール』『紅パチュリー』『紅ルーミア』『紅チルノ』が成り立たない。ちなみにこのことを話した時レミリアが妖怪と妖精と一緒にされるのが嫌とか言ってた。

「へ～」

「まあ、俺とか魔理沙姉さんとか、霊夢姉さんは親父よりだからね」

そんな会話をしながらも、車の中では楽しく過ごすこととなった。

2時間ほどして、俺達は温泉に着いた。なんとまあ、でかい旅館だ。

「でかいな」

「温泉！温泉！」

フランはもうはしゃぎっぱなしである。

「フラン、落ちついて・・・」

「じゃあさっそく、温泉に行きましょう」
部屋に荷物を置いて、温泉に入ることになった。
「蓮次お兄ちゃん！こっち！」
フランに手をひかれる。こっち、女湯・・・
「フ、フラン！こっち女湯！」
「１０歳以下はこっちでもいいの～！こっち～！」
「駄目よフラン。ここはうちではないんだから」
「でもお姉さま～！」
と、フランがレミリアに駄々を捏ねる。た、助けてレミリア！
「それに分かってるでしょ？」
「でも～」
「そんなに入りたかったら家でにしなさい」
「！　わかった！」
レ、レミリア～！
「（感謝なさい、ここで入ることだけは免れたんだから）」

こうして俺は男湯へと入っていった。なんかなのはが連れて来たフェレットが妙に暴れてたな・・・ああ、そうだ。あれって人間の男の子なんだっけ。どんまい

風呂に入ってから気持ちいひと時を過ごし、上がった。そこには確かアルフ・・・という使い魔がなのはたちに絡んでいた。だけどフェイトって子は見当たらないな。見ていると咲夜が撃退し、ため息をついていた。

「なのは様、すずか様、アリサ様、大丈夫でしょうか？」

「は、はい・・・」

「ありがとうございました」

「もう！なんなのよアイツ！気分悪っ！」

と、アリサが怒っていた。まあ、しょうがないか。この後は食事をとって部屋に戻った。部屋割はうちの家族は全員同じではなく、レミリア、フラン、チルノ、ルーミアは俺と同じ部屋で寝ることとなった。最初はルーミアとチルノがまくら投げで遊んでいたけど、途中から弾幕勝負をしようと言い出したので却下して寝かせた。そして・・・

「（蓮次様・・・！）」

「（さ、咲夜？）」

「（ジュエルシードを確認しました！）」

そうか、発動は夜だっけ・・・

「（じゃあ、今日は私ですね）」

「え？」

レミリアたちが光に包まれ、等身大になったのは美鈴だった。

「美鈴、大丈夫？」

「まったく問題ありません。行きましょう！」

「うん」

「「ユニゾンイン！」」

ユニゾンすると、中国のなんというか・・・チャイニーズ格闘用の服みたいになった。

「（一応念のため、仮面でも付けますか？）」

「いや、大丈夫でしょ」

この服装にそれはちょっと・・・

「よし、行こう！」

こうして俺は夜を舞った。

駆けつけると、既になのはのデバイスからジュエルシードが排出されていた。今だっ！

「もらった！」

「「！？」」

二つのジュエルシードを手に取り、俺はそれをもてあそぶ。

「貴方は・・・！」

「やあ、この前振り、金髪の魔導士さん？」

「あ、あなたは・・・？」

なのはは驚いている。まあそっかな・・・

「ジュエルシードは私が貰おう」

「させるかい！」

アルフが俺に襲い掛かる。遅い！

「破っ！」

「がっ・・・」

スペルカードを使うまでもない・・・

「プラズマランサーセット！ファイア！」

『蓮次さん！』

「っく！」

完全に油断した！移動して砲撃だなんて・・・！

「彩符――彩雨！」

虹色の気弾がプラズマランサーを掻き消す

「はあああああああっ！」

そのまま接近してフェイトに襲い掛かる。やばい！制止が効かない！

「バルディッシュ！」

『ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

壁に防がれる。あ、危なかった・・・これって・・・

「（め、美鈴？）」

「（ご、ごめんなさい・・・つい、本気になっちゃって・・・）」

やっぱり、美鈴の意識が俺の感情を上げていたのか・・・怖い

「やることやったし、引き上げる」

「（はい、そうですね）」

「（美鈴？後でお仕置きよ？）」

別の方から咲夜の声が聞こえてくる。

「（ひいいいい！咲夜さんそれだけはご勘弁をぉぉ！）」

「（まあまあ咲夜、とりあえず戻ろう）」

「待ってください！」

戻ろうとすると、フェレットに呼びとめられた。

「何？」

「貴方もジュエルシードを集めているんですか！？」

「うん、まあね・・・あ、安心してくれていいよ。これは封印して最終的にどっかに捨てるから」

「それは危険な物なんです！それなのに・・・」

「じゃあフェレット君、君に聞くが・・・君の所にあれば１００％安全だと言える？」

俺の言葉に、フェレットはたじろく

「そ、それは・・・」

「危険な物って言うけど、そこの女の子だって危険になるだろう？」

「で、でも！ちゃんと封印して・・・！」

「封印しても、危ないものは危ない・・・力を過信したらいけないね」

ぶっちゃけアニメ見てから思ったんだよねー・・・フェレットはなのはに集めさせたけど、それでなのはに危害があるかもってことを考えないのかよって。そういえばフェイトは帰ったのか・・・ま、いいや

「それじゃあね・・・これ以上危ないことしたらだめだよ？」

こうして、俺は空中を飛び、旅館の中へと帰っていった。人がいないのを確認して、ユニゾンを解除した。

「「ユニゾンアウト」」

俺と美鈴が分離する。その途端、俺は膝をついた。

「うっ・・・あ」

「蓮次さん！」

「大丈夫、ちょっとクラって来ただけだから」

すると咲夜が美鈴から出てきて俺を支えた。

「恐らく美鈴の攻撃衝撃が蓮次様の体に負荷を与えたのでしょう・・・まったく」

「す、すいません・・・」

「いや、俺の未熟もあるし、美鈴が悪いわけじゃないよ」

こうして夜は更けていく

部屋

「お兄ちゃん、寝ようよ！」

「うん、もう1時だしな」

あー・・・疲れた

「んふふ～」

いつになくフランがご機嫌である。別の場所でも一緒に寝れるというのが嬉しいのかもしれない。

――コン、コン

「はい？」

こんな時間に誰だ？

「えっと、なのはです・・・」

「なのは？どうしたの？」

ドアを開けると、そこにはなのはがいた。

「その、ね？一緒に寝てもいい？」

・・・・・・Ｗｈａｔ？

「（お兄ちゃんにジュエルシード取られて落ち込んでるんじゃないの？）」

「（マジですか・・・）」

「・・・じゃあいいよ、おいでなのは」

「うん！」

こうして右側にフラン、左側になのはが布団の中にいる。

「ごめんね、蓮次君」

「いや別に・・・」

「ありがとう」

こうして静かに眠りについたなのは。原因は俺なんだけどね。

翌日

「ん？」

――ムニッ

そういえばなのはが一緒に寝てるんだっけ・・・でも、この柔らかい感覚は一体・・・

「ｚｚｚｚ」

俺は何故か美鈴の腕の中で寝てました

「え、ちょ！？@＃＄％＆？！」

結局美鈴が俺に力を入れて呼吸困難になり咲夜を全力で念話で呼んで解決。美鈴はどうやら俺の容体が気になったようで、俺が寝てるときにここに来たらしい。そしてそのまま眠ったとか。

こうして温泉の話は幕を閉じる

幻想０５：温泉（後書き）

秋風「というわけで第５話！」

蓮次「ねたんじゃねーのか」

秋風「もう寝る！」

蓮次「あ、そ」

秋風「では！」

蓮次「次回、幻想０６：さいきょー伝説」

チルノ「次回はあたいが大活躍！」

秋風「どうだろうね」

チルノ「なに！？」

幻想０６：氷結妖精と橙髪の少女（前書き）

とりあえず今回も更新しました

感想待ってます。感想は励みになるので

別の小説もどんどん更新・・・できるように頑張ります

幻想０６：氷結妖精と橙髪の少女

蓮次ｓｉｄｅ

温泉から帰ってきてから、相変わらず平和な日々が続く・・・はずだった。とりあえず現在、学校でなのはとバニングスが喧嘩してバニングスが出て行ってしまいました。

「・・・・・・・・」

「あ、アリサちゃん！」

月村が立ち上がるが、俺がそれを止める。

「月村さん」

「え？」

「君は、なのはを頼むよ。バニングスは俺が連れてくる」

そう言って俺は立ち上がる

「え、でも・・・」

「月村さんはなのはの傍にいてあげてくれ」

そう言って俺はバニングスを追いかけた

「・・・うーむ、困った」

校内を走りながら、俺は考える。アリサは一般人、というのがこの世界での認知だ。魔力を探った時もなのはしか分からなかったし・・・

『蓮次！蓮次！』

「ん？どうしたチルノ」

『あたいにいい考えがあるよ！』

今日はチルノがスモールサイズで俺のポケットに入っている。？のいい考えってなんだよ・・・大丈夫かな

「（どういう考え？）」

『（アタイが分離して空から探してくる！）』

あー・・・なるほどね、まあ確かに悪くはないか。一応、チルノは空が飛べるし・・・問題はないかな

「（じゃあチルノ、よろしく）」

『（アタイに任せとけ！）』

こうしてチルノが分離し、空へと飛んで行った。これによって自動的に咲夜が現れる

「うーん、大丈夫かな」

『（腐ってもユニゾンデバイスです。バカですけど）』

と、咲夜が言う。だよね、バカだけどユニゾンデバイスだよね、見つけたならなんとかなるでしょう・・・

「ん？」

そこへさっそくチルノが帰ってきた

「お帰りチルノ」

『見っけたよ！』

「お、ほんとか？」

チルノにしてはいい仕事を・・・

「なんか変な車に連れてかれてた！」

・・・してなかった

「それって誘拐じゃないか！どっちで！」

「蓮次がいつも帰ってる方で！」

んなの車で追われてたら見つかるわけないじゃん！

「このバカ！」

『ほんと、？ね貴方は』

咲夜の言うとおりだ。まったく・・・どうする・・・？どうすればいい？

「蓮次様、急ぎましょう・・・確かバニングス家は財閥の令嬢です。下手すると彼女の命にかかわる」

「わかった、行くよ咲夜」

ユニゾンをするために人目のないところまで走る。とりあえず学校の裏までくれば誰もいないだろう

「ユニゾン・・・「ちょっと待った！」チルノ？」

「確かに、今のはアタイが悪い！だからそのヘマを取り戻すためにアタイがユニゾンする！」

確かに、チルノしか車を知らないしな・・・しょうがない

「わかった、行くぞチルノ」

「まっかせなさい！」

「「ユニゾン・イン！」」

ユニゾンすることによって俺の体は相変わらず１５，６歳にまで変化する。髪の毛と目は水色で、背中には氷の羽根が生える。

「よし、行くぞ！」

最近この飛行能力にもなれたので、俺はすぐに空を飛ぶ

「チルノ、その車はどっちに向かって行ったんだ？」

「うーん、海が見える方」

海、か・・・確か前に街を回った時に倉庫があった気がするな。きっとそこだ

「少し飛ばす、行くぞチルノ」

『おっけー！』

こうして俺は速度を上げて海鳴の港の方へと急ぐことにした

アリサｓｉｄｅ

下校しようとしたらいきなり拉致された。誘拐・・・もういや、ホント。目隠しもされるしガムテープみたいなので口は止められてるし

「バニングス家の令嬢か・・・いい金になりそうだな」

「んー！んー！」

ちょっと！金払えば解放しなさいよ！いい金になるってあたしを売るつもり！？そんなことを考えていると、どこからか爆発音が聞こえた

「なんだ！？」

「大変だボス！侵入者だ！」

「サツか！？」

「いや・・・妙な奴が・・・一人で！」

声からは焦りと恐怖が感じ取れた。そして・・・

「ぎゃあああああああああ！」

悲鳴が聞こえる。なにが起こっているというの・・・？

「安心しろ、四肢が凍っただけだろ」

冷たくも優しさがある声が聞こえた

蓮次ｓｉｄｅ

ったく、やっと見つけた・・・

『（あはは！凍れ！凍れー！）』

「（チルノ、バニングスがいるからストップだ）」

チルノに制止をかけ、男を見た。男は拳銃を俺に構えている。マシンガンの様だが、どうみても手が恐怖で震えている

「な、なんだテメェ！」

「さあな」

俺は魔力をため、それを放った

凍符――パーフェクトフリーズ

弾幕が発射され、それが空中で凍る

「なっ！？」

「お前に選択肢を与える。このままその子を解放するか、俺に対して足掻いてみるか」

「ざけんな！死ねぇ化け物！」

マシンガンの銃口が火を噴いた。

「残念だ」

俺はそのまま弾幕を発射してマシンガンの弾を消し去り、男にぶつける。ただの氷の塊だ。ただ痛いだけだが・・・

「これだけの氷がお前めがけて落ちてきたらどうなるかな？」

俺の一言と同時に大量の氷が動き出し、男に直撃した。

「がっ・・・」

男の脳天にヒットしたことで男は目を回して倒れてしまった

「大丈夫か？」

俺はバニングスに近づき、ガムテープと目隠しを取った。

「あ、あんた・・・」

「後は警察を呼べ」

とりあえず俺は15歳くらいの恰好だし問題ないよな。後は髪の色も違うし

「あいつら、死んでないの？」

「なんだ？死んでいた方がよかったのか？」

「そういうわけじゃ、ないけど・・・」

どうやらバニングスは俺が殺したものだと思っていたらしい。そんなことするかっての

「さて、帰るか・・・なのはを放置しちまったし」

『（アタイ今日頑張ったよね！）』

「（一応な）」

すずかが説得してくれるといいんだが・・・

「・・・あんた、紅？」

「え？」

なん、だと？

「何の話だ」

「今、なのはって聞こえわよ。男でなのはって言ってるの聞いたのはあの子の家族と紅だけよ・・・あんた、紅なのね？」

ば、ばれた！？そんなバカな！

「何の話かわからないな。すぐに警察を呼ぶといい」

「そういえばアンタのところのフランは元気？」

「ああ、元気だよ、今は昼寝を・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

し、しまったぁぁぁ！！誘導尋問されたぁ！

「やっぱり紅じゃない！なんなのその格好！背！どうなってるわけ！？」

「っく！バカな！なんでこれだけ変装しておいて・・・！」

「フン！このアリサ・バニングスをなめんじゃないわよ！」

っく、くそぉ～・・・

「それともまだ抵抗するんなら力ずくで正体暴くわよ？」

と、アリサが鉄パイプを超至近距離で俺に向ける

「わかった、わかったからどこから出したか分からない凶器をしまえ」

「しょうがないわね」

こうしてアリサに正体がばれるという事態に陥った

海鳴臨海公園　ベンチ

現在、魔法とかの説明中。アリサが知るのは資料だとA，Sからとか言ってなら。まあいっか

「なるほど、魔法ねぇ」

「お前、順応早いな」

「フン、こちとら小さいころから誘拐未遂や誘拐があるのよ？このくらいの事態にはなれっこよ」

随分違うと思うけど・・・まあいっか

「ねえ、もしかしてなんだけど・・・最近なのはが暗いのって、この魔法がらみなわけ？」

「・・・・・そうだな」

ここで嘘をついてもどうしようもないからな。正直に話すべきだろう

「あの子、そんなに危険なことに巻き込まれているの？」

「危険・・・まあ、危険と言えば危険だ。爆弾処理に近いものだしな」

ジュエルシードは危険な古代遺失物だ・・・俺も結構持ってるけど

「あたしに、何か出来ることは・・・？」

アリサは意地を張っていても、怒っていても、やっぱりなのはは心配なんだな

「正直に言って」

「・・・そうだな、あいつが自分から言うのを待つのと、それまで見守ってやればいい」

「遠回しにあたしに出来ることはないって言ってるわね」

「うっ・・・」

まあ、ぶっちゃけちゃうとそうなんだけど・・・

「とりあえず、ホント・・・待ってあげな」

「そうね・・・そうするわ。あと蓮次」

「え？」

「今日はありがと」

バニングス・・・今、下の名前で？

「いや、気にするなよ。バニングスも無事で「アリサよ」え？」

「アリサって呼びなさい。特別に許してあげるわ」

と、頬を紅く染め、アリサがそう言った

「わかったよアリサ、じゃあ帰ろうか」

「そうね・・・ちゃんと帰りもエスコートしてくれるわけ？」

そうだな・・・

『（蓮次様）』

「（咲夜？）」

「（ユニゾンして、アリサ様を空から送りましょう）」

そっか、咲夜も空は飛べるもんな

「よし」

「？」

「「ユニゾン・イン」」
俺は執事服へと変わり、アリサをお姫様抱っこする
「ちょ、ちょっと！」
「ん？こういうのは嫌いか？」
「別に、やじゃないけど・・・先に言いなさい！」
そりゃそうだよな・・・いきなり抱きかかえられたらびっくりするだろうし
「じゃ、いくよ」
体が浮き上がり、どんどん上昇して行く
「ちょ、ちょっと！浮いてるじゃない！」
「そうだよ、暴れないでね」
空はもう夕焼けで、海も綺麗になっていた
「わぁ・・・」
アリサは驚きと喜びの表情でその景色を見ている
「お気に召しましたか？お嬢様？」
「そ、そうね・・・悪くないわ・・・」

と、アリサが言う。ツンデレって大変だね。こうして俺はアリサを家へ送った。この日、なのはとフェイトのデバイスが壊れたことを知るのは、家に帰って資料を見てからであった。

幻想０６：氷結妖精と橙髪の少女（後書き）

別小説の続きを書くので今回はお休みです

蓮次「次回、幻想０７：空気を読まない人は嫌い」

幻想07：Ｓｃａｒｌｅｔ　ｄｅｖｉｌ（前書き）

テスト期間中なのでなかなか更新できませんが、頑張ります

幻想07：Scarlet devil

アリサに魔法がばれてから、数日。少しだけいつもの日常が変わった。

「ちょっと蓮次！聞いてるの！？」

屋上でいつも通りに咲夜たちと食事をしていると、アリサが乗り込んできた。もちろん単身である。まあ、なのはと口を聞いておらず、すずかの所に行かない所を見ると、すずかがなのはの傍にいてあげているらしい。俺は俺でこの我儘なお嬢様の話を聞く毎日だ。

「ごめん、ごめん、なんだっけ？」

「だ、か、ら！私に魔法とやらを教えなさいっ！」

「無理」

「バッサリ切るなー！」

「ぐはっ！」

と、俺が言うと蹴り飛ばされる。咲夜は咲夜でやれやれと言った表情がうかがえる

「いいから教えなさいよ！」

「だから、お前には素質がないから無理なんだってば、何度言えばわかるのさ」

「素質なんかどうでもいいわ！気合よ、気合っ！」
気合で魔法使えたら苦労しないよ。多分管理局の人手不足一挙解決だって。
「そもそも、アリサは魔法を使えるようになってどうしたいのさ」
「それはその、なのはを・・・助けたいから」
顔を紅くして伏せるアリサ。まあ、気持ちはわかるけどさぁ・・・
「大丈夫、俺がなんとかするから」
・・・それに、未だに動きを見せない『あいつら』も気になるところだしな・・・

結局、アリサはずっと俺に魔法を教えろと頼みこんでくるようになった。早く事件を解決させないとな・・・さてと
「レミリア、行こうか」
「ええ、行きましょう」
永遠に幼き紅い月と共に、今日は空を舞う
「「ユニゾン・イン」」
また体に変化が生じる。今回も１７，１８位の年齢体系だ。そして

歯が少し吸血鬼っぽい。そして姿も紅と黒のマントに悪魔の翼が生える。マントと翼を一緒にして大丈夫なのか？

「それにしても、夕方だけど蒸発とかしないのか？」

『問題ないわ、私の体はデバイスですもの。光に弱い弱点が消えたの。まさに最強の吸血鬼と言うところね』

あ、そうですか・・・

「行くよ、レミリア」

翼を広げ、海鳴を飛ぶ。夕焼けは美しく、輝きを見せる。そんな中、海の近くに結界が張られていた。

「さて、どうやって入ろうかな・・・」

『蓮次、私の程度の能力をお忘れ？』

「運命を変える程度・・・」

『そういうこと』

なるほどね、その『結界に入れない』という運命を『結界に入れる』という運命に変えてしまうわけね。すんなりと結界の中に入ると、なのはとフェイトがジュエルシードを取りこんだ敵と戦っている。

「さてと」

『回収するの？』

「うん、一応ね。えーと・・・レミリア、手加減はしてね？」

『わかってるわ』

美鈴の一件でわかったけど、俺とシンクロ率が高いことでユニゾンした奴の気持ちの高ぶりが共鳴して体が言うことを聞かないことがある。ようするに「融合事故」が起きるのだ。これは俺の未熟なのが原因とパチュリーに教えてもらった。

「いくぞっ！」

空から急降下し、弾幕を展開する。その様子になのはとフェイトが驚く。まあ、当然だけど

「あなたはっ！」

「この間のっ！」

「こっちは気にせず早くしろ、そう長くは持たん」

弾幕だけではやはり厳しいか・・・

「（レミリア）」

「（ええ、準備は悪くない。行くわよ）」

俺の右手から一斉に光の弾が飛翔し、散りながら空間へと配置されて行く。まるで空間に描かれた星の様なそれは、美しく見える。

「綺麗・・・」

なのはが静かに呟くのが聞こえる。まあ、間違った解釈ではないけど、戦いだったら認識的には大間違いだ。

「（ここから、集中なさい・・・この子たちを操るのは少し骨よ？）」

「（わかってるよ・・・）」

その星たちで光の軌跡を描いていく。星から星へ、光の帯で自身の姿を他の星へと結んでいく。ジュエルシードを取りこんだ怪物を囲み、伸び続ける。よし・・・

「お前達、離れろ・・・死にたくなければな」

俺の言葉に、なのはは「え？」と言う感じで、フェイトは意味を理解して慌てて空を飛んだ。なのはもユーノに促されて空を飛ぶ。これでいい・・・

「一撃で落とす・・・」

軌跡によって描かれたのは六方星。さあ、始まりにして終焉だ。

「天罰――スター・オブ・ダビデ」

なのはｓｉｄｅ

あの仮面の人が声を出した瞬間、私は驚いていた。声は幽玄で、一

瞬空に作られた星が言ったのかなと思ってしまった。これが天罰・・・そう思えた

「終わりだ」

男の人の一言で大きな星の先端から魔力弾が大量に発射されていました。そしてその魔力弾がジュエルシードを取りこんだ植物に当たり続けていました。ユーノ君が途中で「ありえない」と言っていたけど、私はその言葉を気にせず見続けていた。ううん、目に焼き付いていた。圧倒的な力を・・・

蓮次ｓｉｄｅ

「さて、こんなもんか・・・」

『（あんまりおもしろくなかったわ）』

と、レミリアが言う。まあ、確かにな・・・手ごたえなさすぎ。バリアを張ってたけどすぐに壊れたし、よし・・・回収を

「させない」

「・・・・・・っと」

フェイトが後ろから鎌を構えている。そして遠くからもなのはがレイジングハートを持って降りて来ていた。

「おいおい、俺は封印に協力したんだぞ？」

「それとこれとは、話が別・・・前にも言ったけど、私には譲れないものがある。だから、それを渡して」

「わ、私はただお話したいだけなんだけど・・・」

と、なのはとフェイトがそれぞれの意見を出す。ま、確かに現在ジュエルシードの持っている数が多いのは俺だしな。なんてことを考えている。すると上から声が聞こえた。

「ストップだ！ここでの戦闘は危険すぎる。」

そこにはなのはたちより年上くらいの少年の姿があった。出たな、あれが管理局の執務官か。それにしてもこのタイミングで出てくるって、どんだけ？

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか」

「っち！フェイト、引くよっ！」

アルフが魔力弾を警戒の意味で放った。当然軌道上では当たるはずがない場所だ。なのにわざわざ防御魔法を広げて当たり範囲を大きくして防御している・・・バカ？

「っく！」

フェイトがジュエルシードを取ろうとする。しまった、封印してから安心してたっ・・・！

「ショットっ！」

なっ！？このタイミングでフェイトに魔力弾を・・・！？

「（蓮次！何をっ！？）」

俺はフェイトの前に飛び出し、その魔力弾を防いだ。

「え・・・？」

「まったく、君も無茶をするな・・・その執念を認め、そのジュエルシードは君に譲ろう」

「あ、ありがとうございます・・・」

と、フェイトがお礼を言う。どうでもいいから早く行ってくれ～

「早く撤退したまえ、相方が心配しているぞ？」

「あ、うん・・・」

こうしてフェイトはアルフの所へ行き、撤退していった。ふう、一件落着？

「（また無茶を・・・しかも向こうはそれで済んでないみたいよ？）」

「え？」

「貴様！何故邪魔をした！」

えー・・・

「いや、だって危ないじゃん、女の子にあんなの撃つってお前もてるタイプじゃないだろ」

「黙れッ！彼女たちは僕に攻撃を加えた！この時点で公務執行妨害が適用され、それをかばった君も同罪となる」

「・・・あのさ、さっきのあの狼女の攻撃ってあきらかにお前に当たる軌道じゃなかったよな。わざわざ当たりに行って何が公務執行妨害だよ。そもそも、お前みたいなガキンチョにそんな法律あんの？」

俺が言うと、クロノがブチ切れた。

「黙れと言っている！僕は時空管理局執務官だ！」

「・・・だーかーらー！日本でそんな組織聞いたことないぞ。恐竜戦隊コセイドンかテメーは」

分からない人は「恐竜戦隊コセイドン　円谷特撮作品」でＧｏｏｇｌｅ先生に聞いてみよう♪

「ともかく君を拘束する！」

もうやだぁ・・・こいつ話聞く気ないんだもん

「（冗談言ってる場合じゃないわ・・・言葉でわからないなら力で押しとおるのみ）」

おっそろしいお嬢様だこと・・・まあ、それでこそレミリアだしな

「いいだろう、足掻いてやるよ、執務官様？」

魔力を解放し、弾幕を張る

「この程度でっ！」

蒼い魔力弾が次々と展開されて、弾幕を消していく。そして魔力の砲撃体制を取った

「うお？」

「喰らえっ！ブレイズキャノンっ！」

「うおっと！」

俺はそれをヒラリと回避して着地する。危ない・・・ってだけじゃないのね

「っち！」

今度はバインドが飛んでくる。伊達に執務官とやらをやっているわけじゃないようだ。

「（ちょっと蓮次？いつまで遊んでいるの？）」

「んー・・・アニメで言う執務官で本当にどれくらい強いのかなーって」

「（もういいわ、Ａランクそこそこの魔導士など、敵ではないのだから）」

それもそうだよなぁ・・・しょうがない。次で決めよう

「行くよ」

本気の一撃、それはたった一度でいい・・・大量に物を撃ちすぎるのはいただけない。正確に、早く、そして本気で、目の前の敵へ攻撃を撃ちだす。俺は手を銃の様に見立てた。そしてクロノへと標準を合わせた。

「本気の一撃は、ただ一度でいい・・・喰らえ」

――紅符　スカーレットシュート

「ぐふぁっ・・・！」

クロノが声を上げて吹き飛ばす。その本物の銃にも匹敵するその速さを兼ね備えた妖気弾。スカーレットシュート。無数の弾幕と共に俺はクロノに数発を撃ち込んだ

「（魔力ダメージだから死にはしないでしょうけど、想像絶する痛みでしょうね）」

だろうね、手加減してって言ったのに

「（先に仕掛けて来たのは向こうよ？それに私、今機嫌が非常に悪いの）」

と、ムスッとした表情が伺える声が聞こえた。どうしたんだ？

「（蓮次様が攻撃を受けて怒ってるんですよ、お嬢様は）」

と、咲夜が補足してくれる。

「（ちょ、ちょっと咲夜！）」

「（いいじゃないですか、事実ですから）」

「（あはは、レミリア、ありがとう）」

「（ふんっ！）」

ま、とりあえずと・・・

「ぐ、あ・・・」

俺は倒れ込んだクロノに人差し指を向ける。まあ、撃つ気はないんだけどね

「チェックメイト・・・」

『待ってもらえないかしら？』

そこへ画面が現れる。緑色の髪の女性だ。えーと・・・確か・・・

「あんたは？」

『時空管理局提督、リンディ・ハラオウンです。その子の母でもあ

ります』

「へぇ」

ああ、そう言えばそんな名前だったね。

「その母親が何の用？」

『こちらに敵意はありません、どうか・・・これ以上はやめてもらえませんか？』

はぁ？

「こっちは“公務執行妨害”とやらで攻撃されたから返しただけだよ？」

『それについては、こちらの不備です。ですから・・・「笑えない」え？』

な、口が勝手に・・・

「いい加減にしてもらえる？そもそもこっちは攻撃を受けて、さらには訳の分からない言い分で攻撃を加えて来た。その癖に後から“敵意がない”なんて、ふざけるんじゃないわよ」

女口調になった俺の口、ま、まさか・・・

「（お嬢様！落ちついて！）」

「（黙ってなさい咲夜！）」

レミリア、やっぱりお前か！俺の体乗っ取ってるな！？

『そ、それは・・・』

「そうね、蓮次を傷付けた代償はとても大きい・・・この子の命を引き換えに、許してあげるわ」

そう言ってレミリアがもう一度親指を立て、人差し指を向けた。つまりスカーレットシュートをこの至近距離で撃とうというのだ。おいおいおいおいおい！待ってって！

「（レミリア、やめろって！）」

「（蓮次、あんたは甘すぎるのよ。黙ってなさい）」

「（そうね、レミィの言うとおりだわ。それに、レミィにも考えがあるからよ。蓮次、黙ってなさい）」

と、パチュリーに言われる。それってどういう・・・？

『ま、待ってください！こちらの不手際は謝罪します！どうかお願いです！その子を殺すのだけは・・・本当に、やめてください・・・お願いします』

「・・・・・しょうがないわね、許してあげる。でも次はないわよ？さっさとこの坊やを取りに来なさい？」

『か、感謝します・・・』

と、もう泣きそうなリンディ。まあ、しょうがないと言えばしょうがないが

「どうせこの後、私達のことを知りたいというのでしょう？こちらに来なさい。決してそちらの方へは行かない」

『わ、分かりました。あとで私と部下を連れていきます』

こうしてクロノは転送され消えていった。

「（さ、さすがスカーレットデビル）」

「（ふふん、もっと褒めると良いわ）」

「あ、あの～・・・・」

「ん？」

ようやく主導権を取り戻した俺はなのはの方を振り返る

「えっと・・・蓮次君、なの？」

「・・・え？」

「さ、さっき・・・蓮次の体って」

レーミーリーア！

「（し、仕方ないじゃない！怒ってたんだから！）」

もう、言い逃れもできないようだし、しょうがない

「「ユニゾン・アウト」」

ユニゾンを解除し、俺は元の姿に戻った。そして咲夜とレミリアが姿を現す

「ふえええ！？レミリアちゃんと咲夜さん！？」

「久しぶりね」

「どうも、なのはさん」

「どうして！？どーしてぇ！？」

この後なのはのパニックを抑えるのに時間がかかったことは言うまでもない。

幻想07：Scarlet devil（後書き）

レミリアの鬼畜祭りでした

鬼畜攻めはまだまだ続きます

幻想０８：永遠に幼い月の怒り（前書き）

というわけで、レミリア無双になります

レミリアファンの方、お願いだから性格が違うとか言って石投げないで

幻想０８：永遠に幼い月の怒り

しばらくして、なのはになんとか説明を終えた俺は咲夜とレミリアを待機させた。個人的に咲夜だけでいいと思ったんだけどレミリアがどうしても戻らないと聞かなかった。さらにレミリアが「そこのフェレット、いい加減元に戻りなさい。そんなに人のスカートに興味があるの？」という言葉で、ユーノと呼ばれたフェレットが人に戻った。これでまたなのはが驚いてユーノが説明するのに時間がかかった。さらに咲夜がテーブルやら椅子を用意した。近くの公園が夕焼けに染まっている。少し肌寒くなると、公園のなるべく太陽に近い、屋根のある場所へ移動していた。

「ふぇ～・・・咲夜さんもデバイスなんだぁ・・・」

「ユニゾンデバイス・・・まあちょっと珍しいよね。でもデバイスとか関係なく家族だし」

「うん！そうだね！」

と、なのはは納得してくれた。ユニゾンデバイスの登場はそもそも相当先、Ａ，ｓ編だったのは覚えている。リインフォースとリインフォース？、さらに１０年後にはアギトというのがいた気がする。なので相当珍しいはずだ。さらに時間が経過して、転送魔法によって３人の人物が現れる。先ほどの翠髪の女性、リンディ・ハラオウンと、ボコボコにしたクロノ・ハラオウン、そして女の子。えーと・・・あ、エイミィ・・・って名前だっけ？クロノは多分回復魔法でもしたのかな

「初めまして、時空管理局提督、アースラ艦長のリンディ・ハラオ

ウンです」

「通信担当のエイミィ・リミエッタです♪」

「・・・先ほども会ったが、クロノ・ハラオウンだ」

と、挨拶する3人

「わ、私、高町なのはです！」

「ユーノ・スクライアです」

と、二人が挨拶する。

「紅蓮次といいます」

「十六夜咲夜、蓮次様のユニゾンデバイスです」

「レミリア・スカーレット、咲夜と同じよ」

と、あっさりばらす二人。驚く3人を見てクスクスと笑うレミリア。

頼むから変なことしないでよ？

「まず初めに、こちらの非礼については深く謝罪いたします」

「・・・いえ、別に「あら？その問題を起こした本人からは何もないのかしら？」ちょ、レミリア」

「・・・・・・・・・・」

「自分が正義なら言う気はないのかしら？随分お偉いことねぇ」
と、レミリアが言う。何やらリンディとクロノが念話をしていたらしく、クロノが深々と頭を下げた。
「すいませんでした・・・」
「まあいいわ。それで、貴方達は何しにここへ来たのかしら？」
「はい・・・私達は・・・」
と、リンディが俺達に時空管理局について、そしてロストロギアについて説明していく。そしてユーノもジュエルシードの経緯について話をした。
「立派ね」
「だが無謀でもある」
リンディ、クロノがそれぞれの意見を出した。だがレミリアはというと・・・
「咲夜、お茶お代わりよ」
「はい、お嬢様」
と、お茶をのんきに飲んでいる。そして、話がそろそろ終盤に差し掛かる
「これより、ロストロギア『ジュエルシード』の回収については時

空管理局が全権を持ちます」

「キミ達は今回のことは忘れて、それぞれの世界に戻って元通りの生活に戻ると良い」

そう言われて驚くなのは達、なのはが食い下がろうとするが。

「次元干渉に関わる事件なんだ。民間人が出る話じゃない」

と言われてしまう。そこでレミリアがカップを降ろす

「あらあら、随分と汚い組織ね」

「なんだとっ！？」

クロノが睨む。レミリアの目がドSになってる。

「今まで私達が集めていたものを横取り？いい度胸ね。そもそも今回の事件は貴方達の監督不届きで起きた事件じゃなくて？それを横取りして事件解決の手柄にしようなんて、滑稽だわ」

「レミリアさん、私達は使命を果たそうとするだけです」

と、リンディが言うが、レミリアは口を止めない

「あらそう、それならどうして私達がジュエルシードに侵された植物と戦っていた時にそこの坊やは介入してこなかったのかしら？介入して手助けすれば私達は信用してジュエルシードを渡したかもしれないのに」

「そ、それは・・・」

「大方、蓮次やなのはの魔力の数値でも測定してたんじゃないの？」

レミリアの言葉に、ぐっと押し黙る3人。そこでリンディが切りだす

「まあ、急に言われても気持ちの整理も出来ないでしょう？　一度家に帰って、今晩ゆっくり二人で話し合うといいわ。その上で、改めてお話ししましょう」

この言葉を聞いた瞬間、レミリアの目が光った気がする。

「あらそう、なら帰りましょう蓮次、なのは。私達のことを「心配」してくれているらしいから」

「え、ああ・・・」

「え？レミリアさん？」

と、慌てる俺となのは。だが、リンディは待ったをかけた

「待って頂戴」

「え？」

「紅蓮次君、あなたにはまだ聞きたいことがあるわ」

「はい？」

なんだよ、一体

「貴方の現在所有するユニゾンデバイスであるそこの二人・・・それに貴方の魔力・・・いくつか疑問があるの」

「といいますと？」

「ユニゾンデバイスは今の管理局でもなかなか持ってないわ。その経緯や彼女達のデータ、さらに貴方のユニゾンした時の非常に高い魔力の理由。教えて「教える必要はないわ。蓮次」え？」

レミリアが怒りの表情だ。あのレミリアが、珍しく怒っている

「よくもまあ、ぬけぬけとそんなことが言えるものね、蓮次やなのはを利用しようと考える連中に教えるわけにはいかないわ」

「え？え？レミリアちゃん？」

と、なのはがおどおどしている。

「どういうこと？レミリア」

「さっきそこの坊やが言ったでしょ？「次元干渉に関わる事件なんだ。民間人が出る話じゃない」って」

「ああ、そういえば」

「なのにどうして日時を改める必要があるわけ？」

レミリアの殺気が少し濃くなった。エイミィがすごく怯えている。まあ当然だけど。俺は黙ってレミリアの話を聞くことにした。この

辺はそういうことあんまり考えないで見てたからなぁ・・・

「どうせ私達のことを調べていたんでしょう？今話合いに来たのだって、こんな少人数。人手不足ならそう言えばいいんじゃないかしら？「手伝って欲しい」と」

「そ、それは・・・「言い訳はいらないわ」・・・っ！」

「ユーノの世界で起きた事件の対応に遅れ、私達のことを助けもせずに傍観してデータ収集、さらには危機感煽って協力させようとして、挙句の果てには私達の解析して自分たちのものにしようとする。それをした事実は変わらないわ」

や、やばい！なのはがめっさ怯えて俺の後ろでガタガタ震えてるっ！そしてユーノはユーノでどっかに逃げ去ってるし！

「レミリア、その辺で・・・」

「うっさい！ちょっと黙ってて」

「はい」

こええええ・・・

「悪いけど私達はアンタ達に協力するつもりはないわ。この世界で起きた事件ですもの。私達が解決する。アンタ達に出る幕はない。蓮次となのはならすぐに事件を解決するわ」

「だが古代遺失物は所有してるだけで罪に・・・「どこぞの胡散臭い組織に預けるよりましよ」なんだと！」

「坊や、あなたはさっきから「管理局だから偉い」みたいなこと感じだけど。私達が戦えば一つの組織なんて簡単につぶせるのよ？」

と、レミリアがパチンと指を鳴らした。するとレミリアの中にいた霊夢、魔理沙、ルーミア、チルノ、美鈴、パチュリー、フランが一斉に飛び出し、それぞれが武器を向け、魔力を放出していた。

「私達には個々にSランクの魔導士なんか目じゃないほどの力を持っているわ。貴方達程度、一瞬で消せるのよ」

と、レミリアが言う。だがこれはレミリアの嘘である。俺のユニゾンデバイスとして現存する彼女たちはその能力は割った分だけどんどん減っていく。ただ先ほどのレミリアの力を見ていればそう錯覚してしまう

「・・・・・・」

「さっさとこの世界から出て行きなさい。消されたくなければね」

こうして俺達はなのはを連れてその場を立ち去ることにした。リンディたちはただただそこに立ちつくしていた。

帰り道

「ねえレミリアちゃん！どうしてあんな・・・」

「私はね、ああいう連中が大っ嫌いなのよ。それに、蓮次と貴女を一生管理局の駒にさせるわけにはいかないわ」

「ふぇ？」

と、なのはが首を傾げる

「いいこと？あのまま協力するなんて言ったら一生管理局の駒にされる。ボロボロになるまでね」

「でも、管理局はそんなことしないと思いますよ」

「ユーノ、さっきも言ったでしょ？なのはとフェイト、蓮次が戦ってる中手助けもしない。それはおろか、封印を終えた古代遺失物を自分たちのものにしようとした。そんな連中信頼できるわけないでしょ？」

「そ、それは・・・」

と、押し黙るユーノ

「それに、管理局ばかり言ったけど、貴方だって悪いのよ？」

「え？」

「貴方は自分のせいだと言って他人に頼らず、魔法初心者のなのはに手伝わせた。平穏に生きていた少女の人生を変えたのよ？」

「うっ・・・」

と、レミリアの言葉にダメージを受けるユーノ。まあ確かにな

「貴方が管理局にさっさと連絡すれば問題なく管理局が動いてこの事件は終わっていた。私の言ってることに間違いある？」

「・・・ないです」

「まあまあレミリア、落ちついて」

と、俺はレミリアを抑える。

「さて・・・なのは」

「にゃ！？な、なに？」

いや、にゃ・・・って、猫かお前は

「そろそろさ、家族に教えたら？魔法のこと、ユーノのこと」

「ふぇ？」

「管理局が出て来たし、ジュエルシードも集まり始めている。なのはだって十分危険だ」

今度は確か海で助ける話だろ？ならちゃんと言っておかないと

「管理局に頼らない以上、我々はいつ戦いに赴くかは分かりません。なのはさん、ここはしっかりと、ご両親、御兄弟に真実を話すべきです」

「咲夜さん・・・」

「大丈夫、俺も行くからさ。ユーノもいいかな」

「は、はい・・・そうですね、そうしましょう」

こうして俺達は翠屋に向かうのだった。

幻想０８：永遠に幼い月の怒り（後書き）

というわけで、次回は翠屋です

また波乱が起きる・・・かも？

幻想０８：華人小娘との円舞（前書き）

ども、ショックから立ち直ったばかりでの一話分です。
今回の話ではぶっちゃけ高町士郎が化け物と化してます（人間のレベルではないという意味で）

それと、今回はバトルシーンで非想天則の原曲のｖｓ美鈴　上海紅茶館　～　Ｃｈｉｎｅｓｅ　Ｔｅａ～を聞きながら読むとちょっとだけテンションが上がります

あと、今回は皆さんにお聞きしたいアンケートがあるので、よろしければお答えくださいｗｗ

幻想０８：華人小娘との円舞

公園を後にしてから、俺となのはは翠屋へと足を踏み入れた。丁度閉店の時間らしく片づけがほとんど終わっていた。

「ただいまー」

「おじゃまします」

「邪魔するわ」

「お邪魔いたします」

「お帰りなのは、それにいらっしゃい、蓮次君、レミリアちゃん、咲夜さん」

桃子さんが笑顔で迎えてくれた。片付け終わった店内は椅子が上がり、テーブルはフキンで磨かれていた。

「でもごめんなさいね、もう閉店なのよ」

「ううん、違うのお母さん」

「え？」

「皆さんに、お話すべきことがあるから来ました」

こうして、俺となのはは打ち明けることになる。それは今までのこと、そしてこれからのことだ。桃子さんも頷いて士郎さんを呼びに

行き、兄の恭也と姉の美由希もやってきた。

「じゃあ、お話というのを聞こうかしら？」

少しの沈黙の後、桃子さんが切りだした。

「なのは、君が言うべきじゃない？」

「うん・・・あのね・・・」

なのはが静かに魔法の存在、そして古代遺失物『ジュエルシード』の存在について語った。４人は最初困惑し、信じていなかった。子供が言うことなら大抵はそうなる。でもユーノがフェレットから人間に戻る所を見て驚きを隠せなくなる。さらにレミリアから他のメンバーが現れるところを見れば、何事かとも思うだろう。俺は４人を落ちつかせて喋る。彼女達は肉親でなく、デバイスと呼ばれるものであること、そして俺となのはの今後

「・・・じゃあ、最近なのはが疲れていたのはそのせいだったのね？」

「黙ってて、ごめんなさい」

なのはが一言そう呟いた。母への謝罪だった。ジュエルシードは言わばこの世界で言う爆弾と同じものである。ふとしたきっかけで爆発し、甚大な被害をもたらす代物。そんなものの回収をしていたのだから危険だということは分かっている。

「謝るのは僕です。なのはをこんなことに巻きこんで・・・本当にすいませんっ！」

ユーノがそう言って頭を下げる。

「二人とも、頭を上げて」

桃子さんがそう一言言う。

「ユーノ君のことは事故だったんでしょう？そして傷ついたユーノ君のためになのはが動いた。立派だと思うの。だから自分を責めたらだめ」

と、桃子さんは微笑み、二人の頭を撫でた。

「でも、そんな重要なことなら父さんたちにも話をして欲しかったぞ、なのは」

「ごめんなさい・・・」

「それで・・・蓮次君」

「はい」

「なのはを守っていてくれてありがとう」

桃子さんがそう一言俺に言った。

「え？俺は何も・・・」

「いいえ・・・なのはのことだからきっとこんな話は言い出さなかったはずだわ。ずっと抱え込んでそのうち自分を傷つけて行ったと

思うの。だから言わせて、ありがとう」

「い、いえ・・・」

「それで、蓮次君となのははこれからどうするの？」

今度は美由希さんが俺にそう聞いてくる

「お話をしたい子がいるの・・・」

なのはがそう呟く

「俺達と同じようにジュエルシードを集める子がいます。その子が次どんな無茶をするか分かりません。ですから、引き続きジュエルシードを回収します」

「でも、時空管理局というのがあるんだろう？だったらその連中に任せても・・・「駄目よ」え？」

恭也さんの言葉をレミリアが遮る。

「あんな腐れ組織なんかに任せたら、あの子は逮捕される。最悪その場に居合わせたなのはと蓮次もね」

「どういうことだい？時空管理局というのはそういう事態の収拾を図る組織なんだろう？」

「建前だけよ、そんなの。蓮次と、それになのはを利用しようなんて考えた組織、信用には値しない」

レミリアのきっぱりとした言葉が店内に響く。

「時空管理局は私達が封印するのに手こずっているのを傍観してデータ収集していたわ。自分たちにどれだけの利益を生むのか？そしてこれからどう利用しようかってね・・・」

レミリアはそのあと、時空管理局が俺となのはにしようとしたことを言った。それを聞いた４人の反応はそれぞれだった。美由希さんは「サイテー・・・」と言っていたり、恭也さんは「そいつらを血祭りにあげてくる」といって立ち上がろうとしたり、士郎さんは無言、桃子さんも同じだった。

「理由はどうあれ、子供の心を利用するのは許せないな・・・さて」

と、士郎さんが立ち上がった。

「道場に来てくれないか、蓮次君」

「・・・へ？」

「これからまだ戦うというのなら君の実力が知りたい。なのはを守れるのかどうか・・・見極めたい」

こうして、俺は道場へと足を踏み入れることとなった。

道場

「どうしてこーなった・・・」

話しに来ただけなのに・・・

「さあ、どこからでもかかってきなさい」

どうしようかなぁ・・・俺、剣術なんて出来ないし・・・第一、俺はみんながいないと何もできないぞ？

「さあ、蓮次さん行きましょう！」

何故かとなりに美鈴がいた。

「美鈴？」

「ユニゾンです。別に私達使うなって言ったわけじゃないし、いきますよっ！」

「「ユニゾン・イン！」」

体が成長し、中国拳法の服となる。

「それが魔法か・・・僕の剣はどこまで届くかな？」

「（いきますよっ！）」

こ、こうなったらなるようになれっ！

「いきますっ！」

構えを取って、士郎さんへと襲いかかる。

「はあっ！」

「甘いっ！」

攻撃をかわされる。速い・・・！

「（蓮次さん左です！）」

「っ！」

既に回り込んでいた士郎さんが木刀を奮う

「（蓮次さん！コントロールしますからねっ！）」

え？って・・・体が勝手に！

「覇っ！」

「ぐっ！」

飛んできた木刀に対して拳を突き出し、その威力を殺す。美鈴のとっさのコントロールによってその攻撃が相殺された。

「おお・・・アレを受けきるのか、しかも拳とは・・・なかなか」

「ま、まぐれです」

「（蓮次さん、落ちついて・・・スペルカードだってあります。攻撃の戦略はいくらでもありますよ）」

そりゃわかってるけど・・・一向に打開策が見当たらないよ

「（大丈夫ですよ、その打開策を作るのが私たちなんですから！）」

「行きますっ！」

再び駆け出し、蹴りを繰り出しながら無数の弾幕を放った。弾幕と言ってもそれほどの量ではない。せいぜい投げナイフ程度の７，８個だが、それでも目くらまし程度には十分だ。

「っく！」

「うおりゃあああっ！」

蹴りを放ち、そこからさらに虹色の円が向かって行く。非想天則の蹴り技と同じものだ。さらに俺は攻撃の手を緩めない。ここで攻撃をやめればこちらが負けてしまう。

「（このまま一気に決めますっ！）」

「これで、ラストぉっ！」

そう言いながらスペルカードを切る。これで決めるっ！

――虹符「烈虹真拳」

腕から虹の刃が拳となり、連続で拳を突き出す

「はあああああああっ！」

「おおおおおおおおっ！」

士郎さんもそれをいくつか回避してくる。これを避けるなんてっ・・・！

「「おおおおおおおおおおおおっ！」」

そして、最後の一撃が互いにぶつかり、吹っ飛ばされる。それによって俺は壁にぶつかり、士郎さんも同じように壁に激突した。

「両者、場外！」

恭也さんの言葉が響く。引き分け、かぁ・・・

「あはは、まさか負けちゃうとは・・・びっくりだよ」

「え？」

士郎さんが言いながら立ち上がっていた。俺もなんとか立ち上がってユニゾンを解いた。すると士郎さんの木刀が折れていた。虹符「烈虹真拳」を喰らった後に放った最後の一撃で木刀が折れていたのだ。

「僕の負けだ。これならなのはを任せられるよ」

そう言ってニコニコ笑う士郎さん。美鈴もちょっとボロボロだったりする。

「あたたた・・・やりましたね、蓮次さん！」

「そうだね・・・てか、美鈴大丈夫？」

「あはは、まさか烈虹真拳を受けても一撃を入れられるなんて思ってませんでしたから」

実を言えばダメージの半分な美鈴に行っている。だから負担も少なくて済むのだ。

「さあさ、蓮次君になのはを任せられることが分かったんだし、夕食を作るわ。蓮次君たちも食べるでしょう？」

「え？」

「蓮次君、うちで今日はお泊りしようよ」

ええ～・・・なにそれ、そんな展開聞いてないよ？

「いや、かな？」

「い、いや・・・別にいいけど・・・」

「じゃあいこ！」

と、なのはが手を引く。

「桃子様、私もお手伝いいたします」

「あら、助かるわ。咲夜さんもお願いね」

「かしこまりました」

こうして桃子さんと咲夜が台所へと向かって行った。

「待って！お兄ちゃん遊んで～」

と、フランがなのはと逆の手を掴み、引っ張る。

「お姉ちゃんも遊ぼうよ～」

「いいよ、じゃあ二階で遊ぼう！」

こうして二階で夕食の時間までなのはとフランと一緒に遊ぶこととなった。案外、なのはの家にもゲームが置いてあったことは驚きだったりした。

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

そこは時の庭園。その主プレシア・テスタロッサはイラついていた。「人形」が持って帰ってきたのは２１個のうちのわずか２つ。少ない、少なすぎる・・・これでは自分の宿願が叶えられない。

「これではだめ・・・これでは、私の願いはかなわない」

人形に折檻をした後、血を吐きながらもそう呟く。すると、足音が聞こえた。コツ、コツと、ブーツの音が響きわたる。プレシアはその音に反応して杖を構えて思考する。侵入者・・・だがそれを知らせるものは何も来ていない

「そう構えないでくれないか・・・」

影で見えないが、声で男だと分かった

「何者？ここに来るなんて・・・まさか、時空管理局？」

「そんな物と一緒にしてもらっては困るな」

「じゃあ、何者なのかしら？」

「貴方の願い、叶えようと思いましてね」

男の言葉に、一瞬だけ目を見開く。だがプレシアはそれを隠すように杖を男に向けた

「どういう意味かしら？」

「どうもこうも、言葉の通り・・・「何が望み？」」

プレシアの言葉に、一瞬だけ男が笑っていた。

「協力してもらいたい。プレシア・テスタロッサ」

「私のことは知っているというわけね。貴方は何者なの？」

「ルシフェル・・・そう名乗らせてもらおう」

世界を滅ぼす企みが、動こうとしていた

幻想０８：華人小娘との円舞（後書き）

というわけで久しぶりのルシフェル登場です
メッセで質問がありまして、ルシフェルは大天使では？というのは第０話で書きました。で、どんなイメージですかと聞かれたのでエルシャダイまんまですと答えました。
まだゲームをやってないので何とも言えませんが、まあこの物語では敵という認知をしておいてください

あと、この小説にＯＰとＥＤを付けようと思います。東方の曲がなるべくいいです。お勧めのオリジナル曲をやってくれると嬉しいです例えば

ＯＰ「色は匂へど散りぬるを」原曲（ボーダーオブライフ）
ＥＤ「人間の恋した壊れた妖怪の唄」原曲（芥川龍之介の河童～Ｃａｎｄｉｄ　Ｆｒｉｅｎｄ～）

ま、こんな感じに曲の名前と原曲を書いてくれると分かりやすいです

べつに紅魔郷メンバーしか出てないからってそこから考えなくても大丈夫です。べつに「Ｈｅｌｐ　ｍｅ，ＥＲＩＮＮＮＮＮ！！」でも、「患部で止まってすぐ溶ける～狂気の優曇華院」でも構いません。シリーズ問わず、その自分のお勧めをＯＰとＥＤにしてくれると嬉しいです

では、また次回ｗｗ

幻想０９：博麗巫子と宴（前書き）

前回募集したＯＰ＆ＥＤですが、全部聞いた中でＥＤはこれだっ！ってのがあったんですけど、ＯＰがどうもしっくりきません。

ですので、よろしければまたお勧めのＯＰを書いてくれると嬉しいです。イメージとしては、ロックな感じがいいです

待ってますでは本編をどうぞ

幻想０９：博麗巫子と宴

高町家の騒動の後からしばらくして、ジュエルシードを俺達は順調に集め始めた。今日はなのはと海の方へと赴き、周囲を見る。確か、海に大半が埋まっているはず。時系列でもフェイトが無茶苦茶をして無理やり起動させた気がする。

「うーん・・・咲夜、どう？」

「微妙です。反応はあるのですが・・・星の7割の部分ですし」

「そうだよねぇ・・・」

とりあえず、飛んでみるか。今日は誰にしようかな・・・

「私とユニゾンするわよ、蓮次」

「え？霊夢？」

咲夜と入れ替わって霊夢が姿を現した。

「海にあるのは大量なんでしょ？なのは一人じゃ封印は間に合わない。管理局員だってまだあきらめないで周囲にいるはずだわ。だったら封印が得意な私の出番ってわけ」

確かに・・・間違ってはいないよね。よし

「行こう霊夢」

「わかったわ」

「「ユニゾン・イン！」」

俺と霊夢が光に包まれ、俺の姿がまた成長を遂げる。１９歳前後なのはいつものこと。今回はなんだが陰陽師みたいな・・・うん、なんかそんな感じ

『ほら、ささっと行くわよ！』

「うん」

俺は空を飛ぶ能力で浮き上がり、なのはに念話を繋ぐ。

「（なのは、空から海を散策しよう。ユーノは引き続き公園周辺を捜してくれない？）」

「（わかったの！）」

「（了解、二人とも気を付けてね）」

そうして空を飛んでいると、何やら魔力の流れを感じた。これって・・・

『蓮次！魔力流が感じられたわっ！あの子、この海に垂れ流して強制発動させる気よ！』

げ、原作と同じことをしようとしているのか！？

「霊夢！どっち！」

『こっから真っ直ぐ進んだ場所よ！急いで！』

ま、間に合えよ・・・！俺は加速し、その魔力流の根源の場所へと急いだ。

フェイトｓｉｄｅ

・・・早く、ジュエルシードを集めなきゃ

「フェイト、本当にやるのかい？」

「うん・・・残り６個のジュエルシード・・・全部手に入れないと」

私は魔力を集中させ、そのまま詠唱に入る

「アルタス、クルタス、エイギアス・・・」

私に、あの人は言っていた。ここでジュエルシードを全部集めれば母さんが認めてくれると・・・

数日前

「やあ、初めまして」

「あなた、だれ？」

黒いコートを着た男の人が突然私の部屋にいた。アルフも構えるけ

ど、男の人は笑っていた。

「怪しいものじゃない。君のお母さんから伝言を預かってきた」

「伝言・・・？貴方は一体？」

「僕はルシフェル・・・君のお母さんとは少し付き合いがあってね。さて、伝言の内容だが・・・『残り全てのジュエルシードを集めなさい。全て集めれば、幸せな未来が待ってる』だそうだ。ま、頑張りたまえ」

幸せな、未来・・・

「そうだ、ヒントを上げよう」

「ヒント・・・？」

「君の捜索範囲は主に陸地だ・・・残りはどこか、よく考えてごらん？」

そういってルシフェルさんは消えていった。探してない所・・・もしかして・・・！

回想終了

詠唱を終えて、私は魔法を放った。それによって光の柱が現れた。

６つの柱・・・ジュエルシード！

「あった、残り６つ！アルフ、空間サポート・・・お願い！」

「ま、任せといて！」

私は封印の作業に取り掛かった。

蓮次ｓｉｄｅ

『蓮次！あれを！』

「くそったれ！始めたのかっ！」

６つの柱・・・残り６つのジュエルシード・・・急がないとフェイトが危ない・・・なのはは・・・

「蓮次君！」

後ろから声が聞こえた。よし・・・！

「行くぞなのは！」

「うんっ！」

俺達はジュエルシードの光へと突っ込む。そしてフェイトへなのはが叫んだ

「フェイトちゃん！」

すると、アルフが形相を変えて襲いかかる

「フェイトの邪魔をするなぁぁ！」

「っち！」

『聞き分けの悪い犬っころね・・・蓮次！』

「おう！」

俺はお札を取り出し、それをアルフに投げつける

「っち！」

「待てって！俺達は戦いに来たわけじゃない」

「え・・・？」

アルフが驚いた顔になるが、そんなことを気にしている場合じゃない

「なのは、行くぞ！フェイト、こっちのタイミングに合わせて！」

「え？え？」

フェイトがオロオロする。どうしてこんな展開になったのか突いてこれていないようだ。だが、今はそれより前のことだ！

「一気に封印する！最大砲撃を撃つから！」

俺は手に魔力をため、それをお札に伝えていく。霊夢の力と言ったら、これしかないっ！

「レイジングハート！フルパワー！」

『オーライ、マイマスター』

なのは、そしてフェイトも準備万端のようだ

「（霊夢っ！）」

『（ええ！こっちの準備もできれるわよっ！）』

なら、一気に行くっ！

「ディバイン・・・」

「サンダー・・・」

――霊符

それぞれのエネルギーが収束し、それをジュエルシードに向ける。

「せーのっ！」

後から駆け付けてくれたユーノと、その場にいたアルフがなんとか足止めをしてくれている。そしてなのはの合図で砲撃を放った。

「バスター！」

「レイジーっ！」

夢想封印！

桃色の砲撃、金色の砲撃、そして虹色の光弾が竜巻へと向かって行く。そしてそれらがぶつかり、ジュエルシードの魔力、そして竜巻は収まった。封印されたことで周囲を漂いながら俺達の前にジュエルシードは舞い降りた。

「その、三分割・・・でいいよね？」

本来ならば半分こでいいよねと聞くのだが、俺がいるため三分割と言うことらしい・・・一人の建前は二個か・・・

「いいよ、俺の分は。きっちり半分に分けなよ」

こうして、二人は3つずつジュエルシードを分けた。

「あの・・・」

「ん？」

「ありが、とう」

フェイトがおずおずと俺となのはに言う。そうだなぁ・・・

「なあ、これから暇か？」

「え？」

「今からお茶でも飲まない？なあ、なのは？」

俺の言葉に、フリーズしていたらしいが、すぐに頷いた。

「うん！一緒にお茶しようよ！」

「アンタ何言ってるんだい？敵とそんなことするわけないだろ」

と、アルフが言う。どうやら俺達を管理局の側に着いたと思っているらしい。

「別に敵とかないだろ？俺達はただ「集めてるだけ」だしな。それに管理局についたわけじゃないよ？」

「「へ？」」

どうやら、本気でそう思ったらしい。とりあえず・・・

「陸地へ行こう。ここじゃ寒いから」

こうして、俺達5人は陸地へと向かって行った。

バリアジャケットを解いて、着地する俺達。俺もユニゾンを解いて元に戻った。

「よっと・・・」

「え・・・」

「ん？」

なんだか驚いた顔をしているフェイト。どうしたんだろう
「大方、私とアンタに驚いてるんでしょ？」
と、霊夢が言う。ああ、俺ってこの姿を見せてなかったっけ？だからか・・・
「改めて、初めまして。紅蓮次って言うんだ。よろしく」
「高町なのはだよ」
「僕はユーノ・スクライア」
と、自己紹介する。実はこれは事前に打ち合わせをしていたことだった。必ず、面と向かって、武器を構えず、挨拶をすること
「私は・・・フェイト・テスタロッサ」
「アルフ」
と、挨拶してくれる。さてと・・・
「みんな、出てきていいよ」
そう言うと、霊夢から光が溢れ、みんなが出てくる
「「ええ！？」」
フェイトとアルフが驚いて声を上げていた。まあ当然と言えば当然なんだが・・・

「あはは、これが俺の家族だよ」

こうして、みんなで翠屋へと向かって行った。

翠屋

「じゃあ桃子さん、ケーキお願いします」

「ええ、みんなの分をね♪」

と、桃子さんが厨房へと向かう。

「ケーキ♪ケーキ♪」

「フラン、もう少し大人しくなさい」

と、フランははしゃぎっぱなしで、レミリアは大人しいフリをしてるが、ちょっと楽しみらしく、そわそわしてる。

「あの・・・」

「ん？」

「どうして、私達を・・・」

どうやら、まだ何か思惑があると考えているらしい。まあ、思惑がないと言えば嘘だけど、貸し切りにして士郎さん達が戦闘態勢になってれば管理局の介入を阻止できるっていうのが意図で、フェイトと話合いがしたかったというのもある。

「まず、先に誤解を解こうと思ったんだ」

「誤解？」

「現時点だと多分、君たちは俺となのはが管理局の側に着いたと思ったと思う」

まあ、ああなれば当然だけど・・・

「・・・うん」

と、フェイトが頷く。アルフも無言で頷いていた。

「だけど、俺達は別に戦いを望んだわけじゃない。この街で起きる事件を止めようと思っていただけなんだ」

「だから、フェイトちゃんと戦いたいと思わないの・・・」

と、俺達二人が言うと、フェイトは表情を暗くしている。

「だからさ、俺達に理由を話してくれれば協力する。それに、ジュエルシードを渡してもいいと思う」

「蓮次！それは・・・！」

と、ユーノが立ち上がる。まあ、封印をしようとするなら当然の反応だけど・・・

「ユーノ、元々あれはロストロギアだけど、この世界にある以上“

不思議な石”だよ。ロストロギアなんて単語はどこにもない」

「それは、そうだけど・・・危険な物なんだよ!?」

「危険でも、それは誤った使い方をした結果のことでしょ？力は“危険”だけど・・・正しい使い方をすれば、正しい方向へ導ける。レイジングハートや咲夜達だって、使用する力を誤れば危険な物だろ？」

「・・・それは、そうだけど」

と、ユーノが言う。まあ、ユーノの気持ちは分からなくもない。だからこそ、ユーノにはこのことを理解してほしい。するとそこに、桃子さんが大量のケーキを持ってきた。貸切なので、今日は客がいないため、大きなテーブルに沢山のケーキが並べられた

「さあ、沢山食べてね！」

「わぁ♪」

フランが目をキラキラさせて、ケーキを見る。咲夜がレミリアとフランに皿に乗せたケーキを渡す。

「いただきまーす♪」

と、おいしそうに食べるフラン達。

「はい、フェイトちゃんたちもどうぞ」

「あ、ありがとう・・・ございます」

「なんだか悪いね・・・」

と、フェイトがお礼を言って、アルフも静かにそう言った。

「ま、話はこれくらいにしてケーキ食べよう」

こうしてケーキを食べるのだが、フェイトは何と言うか不思議な表情をしている。

「どうしたの？フェイトちゃん」

「あの・・・なんていうか・・・初めて食べるから」

「で？お味は？」

「おいしい・・・」

少しだけ頬を紅く染め、微笑んでいた。アルフもアルフで気に入ったらしく、次々とケーキを平らげている。いつの間にかみんなで騒いだり、楽しいお茶会になっていた。そして、時刻は夕方になっていた。

「それじゃあ・・・」

と、帰ることになったフェイト。とりあえずジュエルシードのことはまた後日ということにした。それにしても、気になったことが一つ。助言を受けて海でジュエルシードを発見したということ。

「なあフェイト・・・誰から助言をもらったんだ？」

「母さんの知り合いって人・・・確か、ルシフェル？」

「ルシフェル！？」

俺と、近くにいた咲夜が驚いた。それを見てフェイトがさらに驚いているが、まあいいだろう。

「え？」

「・・・なあ、フェイト。今度君のお母さんの所へ連れてってくれないか？」

「え？ど、どうして？」

「・・・ジュエルシードのこともあるし、一度話をしておこうと思うんだ。俺となのはと、ユーノたちから」

少々戸惑うがあるようだが、フェイトは静かに頷いた。

「わかった・・・」

「フェイト！？大丈夫なのかい！？」

「・・・多分、大丈夫。とりあえず・・・また連絡するから」

こうしてフェイトとアルフは帰っていった。俺も翠屋を後に、みんなで帰路に着く。

「・・・・・・・・・」

「蓮次様・・・」

「わかってる。必ずルシフェルを倒す」

俺がそう言うと、咲夜は「そうではありません」と首を振った。

「復讐に駆られて戦ってなどしては、それは蓮次様のためにも、ご家族や恋人の方のためにもなりません・・・それに、ルシフェルがプレシアさんを利用しようとするならば・・・人質としてとられる可能性もあるし、そうなれば世界の崩壊へ一直線です」

「・・・わかってる」

「そして、狙いは恐らくジュエルシードです。どうか、落ちついた対応と対処で戦ってください。私達は貴方の味方なのですから」

・・・そんなことを言われても、正直納得ができない。

「咲夜・・・そこまで言うことはないわ」

「お嬢様・・・」

「復讐に駆られる人間というのは・・・言葉で簡単に片づけることは出来ないわ。そうでしょう？蓮次」

「・・・わかってる、でも」

「ともかく、私達はただ力になるだけ・・・でも、それが本当に正しいことなのか、よく考えなさい」

それっきり、言葉を発することはなかった。復讐・・・それが俺のすべきことか？俺は運命を取り戻すために戦うんだぞ・・・？でも・・・何故だ？どうして、こんな変な気持ちになるんだ・・・？俺には、わからない・・・

幻想０９：博麗巫子と宴（後書き）

というわけで、思っくそ原作ブレイクです。
管理局を絡ませないとここまで来るのかと少々驚いてもいます
とりあえず、管理局は出てきますけど超が付くほどボコボコにします。ユーノの出番が何故か多いです。なんか、私としてはちょっと珍しい・・・

まあ、これからもがんばりますので、よろしくです。
アンケートも待ってますｗｗ

幻想１０：動かない大図書館と堕天使と過信（前書き）

大地震で色々日本が大変なことになっていますが、被災地の人達は少しでも頑張ってもらいたいと思います。とりあえず、小説を更新、明日はもっと更新して、これを読んでたりする人に元気を与えられたらと思ったり。

では本編どうぞ！

幻想１０：動かない大図書館と堕天使と過信

しばらくの時が流れた。原作ではこの時期はもう2人が決闘を始める時間でもあった。しかし、今日決闘はしない。ジュエルシードが全て集まり、今日はフェイトの母がいるであろう時の庭園へと赴く。

「じゃあフェイト、頼める？」

「うん・・・」

こうして魔法陣が展開され、フェイトがブツブツと転送場所を記す。

「８７６Ｃ　４４１９　３３１２　Ｄ６９９　３５８３　Ｄ１４６　０７７９　Ｆ３１２５・・・時の庭園の主、プレシア・テスタロッサの元へ！」

こうして、俺達は時の庭園へと転移した。

時の庭園

「ここが・・・」

最終決戦で、ここが主体となる。時の庭園。ここに・・・奴がいる

「蓮次」

「パチュリー？」

今日はパチュリーが俺の肩にいる。理由は簡単、彼女が一番今回の件で対処がしやすいからだ。

「あまりムキになってもいいことがないわ。本来の目的だって分かってるでしょう？」

「・・・ああ」

「蓮次くーん！行こうって！」

「ああ」

こうして、俺達は時の庭園の中へと入って行った。

部屋に入ると、一人の女性と男が立っていた。プレシアなのは間違いないだろう。だが・・・

「・・・フェイトから聞いているわ。私達に協力すると言っていた子たちね」

「た、高町なのはです」

「・・・紅、蓮次」

俺達が名乗ると、プレシアが一歩前に出た。

「プレシア・テスタロッサよ」

「ルシフェルだ。初めまして」

あれが、ルシフェル・・・俺は静かに男を見る。そこら辺にいそうな普通の人間に見える。

「さあ、さっそくジュエルシードをもらうおうかし・・・らっ！」

突然だった。突然なのはに向けて魔力弾が発射される。

「なのは！」

俺はなのはを抱えて横に飛んだ。フェイトは驚いてプレシアを見る。

「か、母さん！なにを・・・」

「ご苦労だったわフェイト・・・これでゆっくり、そこの2人を始末できる」

「な、何を言って・・・」

っちぃ！どういうことだ！？フェイトが俺達を陥れたとは到底思えない。

「蓮次、彼女の目を見て」

「目・・・？」

言われるまま、俺はプレシアの目を見た。ひどく濁り、淀んでいる。

「何かの催眠魔法が掛っているわ。多分、プレシアの本来の欲望を強化するようなものね・・・」

「だったら、アイツを倒せばいい！」

「おやおや・・・怖い怖い」

と、ルシフェルが笑みを浮かべる。余裕と言うことらしい。

「パチェ！」

「ええ、行くわよ！」

「「ユニゾン・イン！」」

姿がすぐに変わり、紫色の髪に代わり、ロングになる。そして手には魔導書、薄紫のマントが俺に装備された。背格好は相変わらず17、8歳だ。

「ノンディレクショナル・レーザー！」

本を開き、弾幕を展開する。無方向性のレーザーはルシフェルに向かって行くが、バリアの様なものに弾かれる。

「なかなか・・・だが、この程度か？」

「そう思うなら思っていろ！」

詠唱を終えた。後は相手にぶつけるだけ

「なのは！フェイト！プレシアさんを拘束しだい離れろ！」

プレシアはどうやらルシフェルが操っていることでピクリとも動かない。なのはが頷き、バインドをプレシアに掛けた。フェイトも苦い顔でバインドをして、その場から離れた。それと同時にレーザーが打ち消される。

「さあ、次は何を見せてくれるのかな？」

「次も何も・・・これで死ね！」

――火符　アグニシャイン

景色が揺らぎ、炎が生まれる。その炎は火の玉となり、ルシフェルに襲いかかった。これならば避けられまい！

「むっ！なかなか熱いな・・・」

「一気に決める！」

『わかったわ・・・でも油断したら駄目よ』

パチュリーの言葉を聞きながらも、俺は詠唱を唱え続ける。炎の次はこれだ。

――木符　シルフィホルン

言葉と共に、翠色の風が辺りを支配する。そして針のように鋭利な植物がルシフェルに襲い掛かる。

「炎の次は風・・・なかなか面白いことをするね」

「言ってろ・・・お前だけは、許さない！」

風が逆巻いて、ルシフェルを襲う。おかしい・・・

『蓮次』

「ああ、俺も思った・・・」

奴は何故反撃をしてこない？だが、どんな理由であれ、好機であることは間違えない。このまま一気に決めてやる！弾幕を展開しながらが、俺は続けて詠唱を行ってスペルカードを展開する。

――木&火符　フォレストブレイズ

炎が渦となり、そのまま力が混ざり合ってルシフェルに向かって行く。だがルシフェルはそれさえもバリアで防ぎきる。バカな・・・なんで、通じない！

「この程度では運命など変えられんよ、少年」

「貴様――！」

『蓮次！落ちつきなさい！』

「うあああああああああああああああっ！」

詠唱を済ませてストックしていたスペルカードを取り出し、一気に発動させた。もう周囲のことなど関係ない。一気に決めてしまえばいい。

――月符　サイレントセレナ

魔法陣が展開され、砲撃と竜巻がルシフェルを襲った。さらに魔法陣から大量の弾幕が放たれる。これで終わりだ！

「うおおおおおおおおおおおっ！」

光がルシフェルを包み、爆発を起こした。

「ハァ、ハァ・・・や、やった・・・？」

『どうでしょうね・・・手ごたえは、あったけれど』

そうだ・・・手ごたえはあったし、直撃していた。敵は仮にも天使・・・致命傷は負わせられなくても、ダメージは与えているはずだ。段々と煙が晴れてくる。やったか・・・？

「今のは効いたな・・・なるほど・・・」

「ば、バカな・・・」

そこには余裕で立っている男、ルシフェルの姿があった。

「あれほどの弾幕を・・・スペルカードまで使ったのに・・・！」

「流石と言うべきだ。神の力・・・だがその程度では私には勝てない」

「くっそ・・・っくっそ・・・くっそぉぉぉ！」

魔力を最大限に発揮し、ルシフェルに向ける。

「くらえええええええっ！」

『だ、駄目よ蓮次！そんな無茶苦茶に魔力を・・・！』

――――火水木金土符　『賢者の石』

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！」

４つの石が宙を舞い、弾幕が大量に降ろされる。それは小さいものから大きなものまで、大きさが定まっていない。きっと俺の魔力が不安定だからだろう。だが、そんなことを気にする俺ではない。今は目の前の敵を潰さなければいけない。賢者の石が砕け、その破片は弾幕となり再び降り注ぐ。外から見れば明らかなるオーバーキルとなるだろう。だが、それでも足りない。俺の命を、家族を、『アイツ』を『アイツ』の家族を、消した運命に仕向けたあの男を、俺は許せない。もっと・・・もっとだ！殺す、目の前の敵はコロス！

コロスコロスコロスコ

そんな俺の目の前で、男は笑っていた。

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

蓮次の前に、立っていた。しかも先ほどとは違って無傷。服には汚れもない。

「な・・・」

絶句する蓮次。だがルシフェルは短く笑っていた。

「ふっ・・・まだまだ、弱すぎる。これで私を殺すなど・・・たいしたことがなさすぎる」

「ぐっ・・・このっ！」

「やめておけ、魔力ももう空っぽだろうに。その年齢の体では『それ』が限界・・・その程度なんだよ。今の君では」

言いながら片膝をついた蓮次を見る。まるで自分の楽しみであるかのように

「私を追ってみろ・・・今度はもっとましなＧＡＭＥをしよう」

そう言って一歩、また一歩歩き出す。蓮次は動こうとするが、身体が限界に来ているせいで動くことは叶わず、その場に倒れ伏した。

「ぐっ・・・ちく、しょう・・・」

「またな、次はもっと面白い玩具で遊ぶことになる」
言いながらルシフェルは背を向け、闇の中へと消えていく。
「・・・・・・・・・・・そう、私を憎んでくれていい。それがお前の道になるのだからな、蓮次」
ルシフェルの言葉は、誰も聞くことはなかった。

蓮次ｓｉｄｅ

畜生、畜生、畜生！
「ちくしょー！」
「蓮次様！大丈夫ですか！？」
ユニゾンが解け、咲夜が俺を支えてくれた。
「・・・・・・・・・逃げ、られた・・・」
「蓮次様・・・」
「ざまあないわね・・・蓮次」
咲夜の身体からレミリアが出てくる。
「咲夜は言ったでしょうに。復讐をすべきでないと」

「・・・・・・・・・」

「貴方の弱さが、あの男を倒せない原因よ。何故だかわかるから？」

わからない、分からない、わからない！何故！？何故俺は奴に勝てなかった！？力はあった！奴を倒せるには十分の・・・

「蓮次」

「え？」

不意に、霊夢の声が聞こえた。そして仁王立ちした霊夢がいる。次の瞬間

――ゴンッ！

鈍い音がした。非金属と非金属、つまり俺の頭と霊夢の頭が激突する音であった。目がちかちかする。もしかしたら周りでひよこか星でも廻っているかもしれない。そして目の前では霊夢が痛そうに頭を抑えていた。

「～～～～っ！慧音みたいなことをするもんじゃないわね」

「れ、霊夢・・・？」

「頭冷やしなさいよ、このバカ」

ば、バカ・・・

「別にね、私としてはアンタのことはどうでも良いわ。復讐しよう

がなにしようが、それがアンタだもの。他人の私達・・・本来の私達だったら干渉もする必要もないし、する義理もない。でもね、私達は本来の幻想郷の人間のコピーにして、ユニゾンデバイスであり、アンタの味方で家族なの。この意味わかる？」

「・・・・・・・・・」

「あの戦いの中で、アンタは一度でも私達を頼ったかしら？」

「・・・頼って、ない」

俺は自分の力を過信し、無我夢中で奴に襲い掛かっていた。それが自分の力だと勘違いして、それが俺の力だからと思い続けて・・・

「情けねぇ・・・」

その一言に尽きた。その結果がこれだ。体はボロボロで魔力はすっからかん、その上みんなには怒られ、ルーミアやフランにさえも睨まれる始末だ。自然と涙が零れる・・・まったく、本当に駄目な人間だな俺は・・・

「バカね・・・なくなら最初から私達を頼れってのよ」

霊夢が言いながら俺をゆっくりと抱きしめる。身体は9歳でも中身は２０を過ぎた自分。でも、霊夢の行為は嬉しかった。そう、嬉しかったのだが・・・

「次やったら、頭突きじゃ済まないからね」

ボソリと聞こえたその声はとても怖かった。

「さて、そろそろ行かないといけないわね。なのはたちが心配だわ」

「そ、そうだな・・・っ！」

「駄目ですよ、そんな状態では・・・「蓮次君！」なのはさん」

そこへ、なのはが駆け寄ってきた。俺の姿を見て一緒に戻ってきたユーノも悲鳴を上げる。

「蓮次！どうしたんだいその傷！」

「な、なんでもない・・・寝てれば治る」

俺の言葉に、なのはが涙目になる。現在は美鈴に背負われている俺。咲夜はどうしたんだ？

「パチュリー様、これ本当によろしいんですかね？」

「ええ、あの女を救うのに十分な材料よ・・・丁寧に扱ってあげなさい」

「重いのかー」

遠くでポッドに入った女の子を運ぶ咲夜とルーミア、チルノなどの姿があった。確か、死体だったな・・・名前はアリシアだっけ

「あ、あれって・・・」

「ああ、なんかパチュリー様曰く、あの女の人を救う鍵って言って

ましたよ」

と、美鈴が思い出したかのように呟く。そういえば・・・

「フェイトとプレシアさんの様子は？」

「えと、フェイトちゃんはまだプレシアさんを見てる」

「プレシアさんは操られていたせいか、ダメージが大きいみたいだ。少し安静にしないといけないね」

「そうか・・・」

さて、原作だとあそこまで壊れた女は治しようがないかもな・・・どうしたものやら。そんなことを考えていると、転送魔法が展開されていた。そこには１００はいるであろう管理局員。そしてＫＹに定評のあるクロノ・ハラオウンの姿があった。

「そこを動くな！」

「・・・何の用かしら？坊や」

レミリアが言うと、クロノが睨みつける。

「この場所で起きた次元震とお前達ユニゾンデバイスの不正所持！その容疑で紅蓮次！お前を拘束する！」

本当にＫＹだな・・・そもそも・・・・・こいつらどうやってここに・・・

「大方、私達の後を追跡でもしてたんでしょうね・・・抜け目がないわ。まるで犯罪組織ね・・・」

「僕たちは犯罪者じゃない！」

「・・・なら聞くけど、この場所でも貴方達に権限はあるの？私達を追跡してきたのは組織的な尾行なんでしょうけど、私達からとれば悪質なストーカーね・・・それにここ、時の庭園はプレシア・テスタロッサ個人の所有地よ？不法侵入と取っても相手側はおかしくないわね？」

またしてもレミリアの毒舌な言葉に黙ってしまうクロノ。レミリアは相変わらずやれやれとため息をつく。

「わかったかしら？貴方達に私達を犯罪者と呼ぶ道理はないし、捕まえる権利もないのよ」

「話していてもらちが明かない！君たちもろとも拘束させてもらう！君たちの主はそんな状態だ。投降するのが利口だぞ！」

くっそ・・・こんな身体じゃなければ・・・

「・・・・・・お姉さま」

「フラン？」

突然だった、フランの声が聞こえたのは。かすれる意識の中で、フランは一言こう呟く。

「この人達、面倒臭い」

「・・・そうね、フラン遊んであげなさい」

「いいの？」

「ええ、思う存分ね」

ま、まずい・・・

「ふ、らん・・・ま、待て・・・」

「大丈夫だよお兄ちゃん。遊ぶだけ・・・壊さないようにするよ・・・・・・極力だけど」

最後の言葉が、聞き捨てなら、ねぇ・・・俺はそこで意識を落としてしまった。

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

蓮次が気を失ってから、フランの元に全員が集結してしまった。終結する前に、なのはたちに蓮次とカプセルに入った子供を転送させるように促していた。ユーノも戸惑っていたが、現状の管理局の理不尽に咲夜たちの指示に従って転送して消えた。必ず翠屋まで逃げること・・・と。そして残るのはフランドール・スカーレット。吸血鬼姉妹の妹にして、幻想郷でも危険人物に入る少女である。

「フフフフ・・・ヒサシブリダナァ、アソブノハ」

フランの言葉が、段々と片言に聞こえてくる。それだけ遊ぶことに

集中したいのであろう。そして局員たちはその恐怖に飲み込まれて行く。その子供の無垢な言葉であるはずなのに、足が竦んでしまう。そして、フランは手を広げ、ニヤリと笑った。

「オニイサンタチ・・・・・・・・・アソボ？」

幻想１０：動かない大図書館と堕天使と過信（後書き）

というわけで、次回はフランちゃん大暴走です。そしてプレシア、アリシアの運命はいかに！？というわけで次回もお楽しみに！

ちなみにフランの手の広げるポーズはＢａｄ　ａｐｐｌｅ！のフランのポーズをイメージしてくれると分かりやすいと思います。次回はＵ．Ｎ．オーエンは彼女なのか？をかけて小説を読んでください

それではノシ

幻想11：Sister of the Devil（前書き）

今回の話を一言でまとめますと

やりすぎました

うん、ホント・・・フランちゃんが大暴走だ！わ～い！って感じです
とりあえず本当に東方紅魔館の「U．N．オーエンは彼女なのか？」
を聞きながらフランちゃんの活躍をお楽しみください。

一応今度とかはまだユニゾンしてない魔理沙やルーミアとかもどん
どん活躍させるのでお楽しみにしてください

それでは始まり始まり～

Q．今回の事件（話）について、何か言うことはありますか？
容疑者　秋風「ついカッとなってやった（書いた）反省はあえてし
ない（笑）」

幻想11：Sister of the Devil

Side Out

「オニイサンタチ、アソボ？」

フランがそう静かに言った。その言葉にたじろいた人間は何人かいるはずである。そう、たった一言・・・その言葉だけで。たかが子供の誘いである。だが、それと裏腹に浮かべるフランの邪悪な笑みは恐ろしいものであった。そして、フランは静かに呟く

「オニイサンタチハ、カンタンニコワレナイデネ？」

その次の瞬間、フランが空中に浮かびあがり弾幕が放たれる。その紅い弾幕は大雨のように降り注いだ。かつて霊夢、そして魔理沙という二人の人間を苦しめた少女が力を解放する。しかし、クロノはこの弾幕を分かっているので、すぐに局員に指示を出した。

「全員散開しろ！弾幕をよけながら攻撃するんだ！」

クロノの指示で全員が飛んだ・・・と思われた

「ぎゃっ！」

「ぐあっ！」

しかし、反応に遅れた数人の局員が弾幕を直撃する。１００もいる局員は数が仇となる。バリアジャケットを貫通して吹き飛び、血を吐き散らして倒れる。呼吸はしているようだが、その場に蓮次がい

れば、止めに入るであろう。そしてフランはさらに弾幕を展開しながら手を開き・・・閉じた

――ドオォォン！

爆発が起き、倒れていた局員たちのデバイスが粉々に吹き飛んだ。それを見てフランは無邪気に笑みを浮かべる。

「あはははは！あの杖も私の力が働いた！働いた！」

と、嬉しそうである。そんな中、クロノが弾幕をかすりながらも声を上げる。

「貴様！何をした！」

「別にー？私の能力で壊しただけだよー」

「能力だと！？稀少技能か！？いや、デバイスなどに稀少技能があるはずが・・・」

と、クロノが混乱する。稀少技能、すなわちレアスキルとは、本来人が持つ特別な能力のことでありその名の通り、普通の人は持っていないスキルのことだ。古代ベルカ式魔法そのものや召喚魔法も術者の稀少さゆえ、レアスキルに認定されている。古代ベルカ式魔法を操る術者の中でも、特筆すべき固有スキルを持っている者が幾人かおり、それらはレアスキルの中でも特別扱いとされる。人間の中で簡潔に例えるならば、咲夜の時を止めたりすることも同じように稀少技能としてこの世界で扱われたはずである。しかし、フランはあっかんべーの顔をする。

「教えてあげな～い！」

そう言ってフランはスペルカードを取り出した。

――禁忌　クランベリートラップ

４つの魔法陣がフランから飛び出すと、そこから弾幕が発射される。それは先ほどからフランが撃つものとは違い、青と紫色の弾幕が展開される。だがそれだけではない。その魔法陣がイレギュラーに動き回る。

「うわああっ！」

「ひぃぃ！」

局員たちが悲鳴を上げる。圧倒的な力がそこにはある。１００の管理局員でもそれに対応することが出来ない。

「怯むな！迎え撃て！」

クロノが叫ぶが、次々と局員がやられ、デバイスが爆発する。クロノも魔力弾で対抗するが、この前受けたスカーレットシュートが蘇る。これもそれ以上の威力であるので、クロノも若干引き気味だ。だが、フランは止まらない。

「あははは！もっともっと遊ぼうよ！」

弾幕が再び展開される。先ほどとは違って倍の量である。これだけの弾幕でも、優秀な局員はクロノを含めて避け始める。目がようやく慣れて来たというのが正しいだろうが、それでも既に３０人はノ

ックダウンしている。

「スティンガースナイプ！ショット！」

「あはは！すごいすごい！じゃあ・・・次はコレ！」

追尾性があるスティンガースナイプをものともせず、フランは再びスペルカードを取り出し、発動させる。

――禁忌　レーヴァンティン

「ぎゃあああああああああっ！」

フランを取り囲んでいたはずの局員たちがなぎ払われて行く。その太いレーザー砲と、後から来る弾幕によって次々と局員たちが倒れる。

「っく！」

「マダマダ！タノシイアソビハコレカラダヨ！」

フランの無邪気な声がそこに響きわたる。最早建物は見る影もなく倒壊し、廃墟と化している。だがフランには関係ない。ただ目の前にいる人間たちと「遊びたい」だけなのだから。

「サア、ツギハドウカナ？」

「もういやだぁ！助けてくれぇ！」

数人の局員が転送魔法を使って逃亡しようとする。それを見たクロ

ノが声を上げる。

「逃げるな！戦うんだ！」

「ドウシテニゲルノ？アソボウヨ」

再びフランが手を開き、そして握る。今度はその転送魔法の穴付き、それを破壊した。最早逃げるすべがない。それに局員たちは絶望する。だが、クロノだけは未だに強気である。

「ま、負けるな！僕たちが倒せばいい！」

「アハハ、オニイチャンハアソンデクレルンダネ、モットアソボウヨ」

――禁忌　フォーオブアカインド

スペルカードと共に、フランが４人へと増えた。そう、分身や残像ではない『増えた』のである。

「アハハハハ！」

「タノシイアソビハ」

「コレカラダヨ！」

「サア、アソボウ！」

４人から一斉に弾幕が発射される。先ほどの量のまま、４人分の弾幕。流石にそれを受けたり避けたりできる局員はそうはいない。こ

の弾幕の威力だって普通ではない。レミリアのスカーレットシュートに劣っているが、それに似た威力は存在している。次々に弾幕が放たれ、局員に命中していく。まるで地獄絵図とも言えるその光景は、普通の人が見れば嘔吐をしてしまうかもしれない。一方のアースラでも、リンディがその映像をモニターで見ていた。

「・・・・・・」

そしてブリッジの惨状。エイミィを始め、その地獄絵図に対応できずに吐き始めたり、奇声を上げたり、倒れたりしている。エイミィだけが、なんとか吐きながらも正気を保っている状態でもあった。そしてリンディが告げる

「エイミィ、倒れている局員たちを至急収容して！私が出ます！」

「でも、艦長！ゴホッ・・・」

「そしたらすぐに撤退準備よ？いいわね」

エイミィの背中をさすり、エイミィを落ちつかせた。リンディはすぐさま転送ポートへと走って行った。

一方の時の庭園・・・もはや見る影もないわけだが、そこでフランが暴れまわっている。まだ数人の局員たちが対抗しているのだ。１００いたはずの局員の数は、クロノを含めて２０ほどにまで減ってしまった。クロノも最初の優位そうだった顔はどこへやら、今は絶望に染まっている。そして、フランが小さく呟く

「お兄さんたち弱すぎ～！」

「ぜーんぜん」

「相手にならないじゃない」

「もうちょっと頑張ってよ」

と、４人のフランが言いながら、最後にフランが一人へと戻る。

「っく・・・！悪魔め！」

「うん、そうだよ～私は悪魔の妹、フランドール・スカーレット。お兄さんたち弱いね」

「何故僕たちに従わない！君たちの行為はただ自分の首を絞めるだけだ！」

「ふぅん、それで？」

と、フランがつまらなそうに言う。

「何・・・？」

「襲いかかってきてそれ？私、お姉様みたいに難しいことは分からないよ。でもね？貴方達はお兄ちゃんを危険だといったり、理不尽を私達に叩きつけた。そんな人達が言うことなんて、信じられないもん」

「っ・・・今からでも遅くはない！我々に従えば、その力は正義のために使えるんだ！」

「正義？それって何か私達に意味があること？悪魔に正義なんてないよ。お話も嫌いだし、もう終わりにしようか・・・・・・・・モウ、アキチャッタ」

そう言ってスペルカードを取りだす。それはこの戦いに終焉を意味するカード

――禁弾　カタディオブトリック

フランの頭上に特大の弾幕が展開され、それが地面へと降り注いでいく。そしてそれは時の庭園の壁を跳ね、地面を跳ねる。それによってクロノ達を３６０度で囲み、弾幕が飛来する。最早逃げ場などない。

「アハハハハ！チョットダケオモシロカッタヨ！バイバイ！」

次の瞬間、クロノ達が立っていた地面が爆発した。

「うわあああああああああああっ！」

クロノが吹き飛ばされる。だが次の瞬間、空中に舞ったクロノをリンディが跳んでキャッチしていた。

「クロノ！」

「かあさ・・・艦長・・・」

「喋ってはだめ・・・寝てなさい」

そう言ってリンディがクロノを降ろす。立っているのはリンディだけ。他の１００いた派遣されし管理局員は全滅。リンディはただただフランを見る。フランは新たな人間に驚きもせず、無邪気に笑っていた。

「アハハハハ、ツギハオネエサンガアソンデクレルノ？」

「・・・・・取引をしに来ました」

「取引？」

フランが首を傾げる。この状況で取引など、今更するまでもない。だがフランがここにいる以上、脱出は出来ないし、転送魔法陣を出してもそれを破壊されてしまう。

「この子の命・・・どうか、助けてください」

「それってただのお願いでしょ～？取引じゃないじゃなーい」

と、フランが言う。まあ、確かにその通りである。だが、リンディはそのまま続ける。

「代わりに、私の命を差し出します・・・それが出来なければ、刺し違えても貴方達を・・・」

「・・・・・・・・何を勘違いしてるのかしら？」

「え？」

突然フランの中から声が聞こえる。それはフランの声ではない。

「あ、お姉さま～」

「フラン、もういいわ。私の中にいなさい」

「は～い」

そう言ってフランはレミリアの中に入って行った。

「自分の息子を助けるために自分の命を差し出す・・・敵ながら良い心掛けね」

「・・・・・・・・・」

「ただ、どうやら貴女はいくつかの勘違いをしているみたいね」

と、レミリアは笑う。

「か、勘違い？」

「まず、一方的に敗者となった貴方達に取引などする権利はないわ。あるのは降伏と命乞いだけ。誰の命を奪う、奪わないなんてそんな権利は貴方にない」

「っ・・・！」

当然である。優位な物が取引をするのならともかく、まだ自分たちが管理局だからということで優位だと思っているリンディだったのだが、そのレミリアの言葉で気が付く。自分たちがそんな権利がないことくらい分かっている。息子を守るために自分は何をいってい

るのだろうかと。

「それに刺し違えるとか言ってたけど、無理ね。フランには貴方達が束になっても勝てない。もう証明されたでしょう？」

「っく・・・」

その通りだ。刺し違えるなど、お門違いもいいところだ。そんなことを出来るわけもないし、そんな風にできる強さもない。実際フランだって「本気」を出したわけではない。その気になれば、ここ一帯を焦土と化すことも可能だった。

「まだあるわ。貴女、アレがフランの本気だと思ったの？」

「え？」

と、驚いた顔になるリンディ。当然だ。あれだけの局員を圧倒する力。アレが本気でないはずがない。そんなことを思っていた。

「そこの坊やはともかく、あそこの局員たちの実力は知らないけど・・・フランはそうね、２割も出してないわよ？力」

「そ、そんなバカな・・・」

リンディは絶句する。今回派遣したのはクロノを含め、Ａランク以上の魔導士たちだった。どの魔導士たちも優秀で、将来的に有望な局員たちである。それがあんな小さな少女の２割の力に負けたのだ。いや、２割というだけであり、１０割を出せばどんなことになっていたか予想もつかない。

「良いことを教えてあげる。うちのフランの力・・・この世界でいう稀少技能は『ありとあらゆるものを破壊する程度の力』よ？」

「ありと、あらゆる・・・？」

「全ての物質には「目」という最も緊張している部分があるわ。そこを攻撃することであらゆるものを破壊することができるの。でもフランは、その「目」を自分の手の中に移動させることができるわ。それによって手を握り締めて「目」を壊せば無条件で対象を壊すことができるの・・・この意味、分かるんじゃない？」

リンディも見ていた。フランが手を開き、閉じただけでデバイスが次々と破壊され、爆発していった。それはつまり・・・

「その気になれば・・・」

「そうよ、ここに転がる局員たちは木端微塵・・・血も残らず消滅したでしょうね」

クスクスと笑うレミリアと、対照的に真っ青になっていくリンディ

「そして最後の貴女の勘違いを教えてあげるわ」

「最後の、勘違い？」

「・・・・・・フラン、言ってあげなさい？」

その言葉と共にフランが再びレミリアから出て来た。

「うん、この人達・・・別に私殺してないよ？」

「え・・・？」

「吐血こそしてたけど、別にそこまで傷は深くないわ。すぐにでも転送してあげたら？」

「エイミィ！」

リンディが最後まで聞かずにすぐさまエイミィに局員たちを転送させる。クロノも同様だ。そしてレミリアがリンディを見る。

「さて・・・じゃあ、貴方が望む『取引』をしてあげるわ。ただし、私達が決めた条件よ」

「・・・どう言ったもの、でしょう？」

リンディの言葉に、レミリアはニヤリと笑った。

「今後一切、私達に干渉しないこと。地球に足を踏み入れないこと・・・それは貴方達だけじゃなく全ての管理局員がね。そして今後私達に関わろうとしたら容赦なく殺すわ。そしてこの世界で起きた事件にはいかなる理由があろうとも干渉しないこと・・・守れるなら貴方達の命を保障して上げるわ」

「もし、断ったら？」

「愚問ね」

言いながらレミリアはスペルカードを取り出した。

――神槍　スピア・ザ・グングニル

カードが紅い槍へと変わった。

「今すぐにでも、貴方の船めがけてこいつをお見舞いするわ」

要するに、断ることは自分の部下たち、派遣された局員たちの死が確定する。

「悪いけどね、そろそろ私達もイライラが限界に来てるの。不可抗力とはいえマスターになったあの子・・・その子を傷つけられるのは非常に不快なの。さあ、貴女の選択肢を選びなさい！私達に刺し違えて見る？それとも断ってでも私達を我がものにしようとする？逃げ帰って再び兵を揃えて私達に挑む？それとも私達の最大の譲歩である条件を呑んで二度と私達に関わらないか！さあ選びなさい！リンディ・ハラオウン！」

レミリアの強い殺気と言葉に、リンディの手は震えていた。自分の決断で全てが決まってしまう。守るべきは使命か？それとも命か？リンディの脳裏に、大切な息子が浮かんだ。

「わかりました・・・貴女の条件を飲みます」

「・・・そう、素直な子は好きよ」

「素直な、子・・・」

自分より外見が年下な少女に、子などと言われるとは思ってなかった。

「・・・何意外そうな顔をしてるのかしら？言っておくけど、私とフランは貴女なんかより何百年も多く生きてるのよ？」

「え・・・」

「まあいいわ・・・とっとと行きなさい。これが最後の警告よ」

「はい・・・ご迷惑、おかけしました・・・」

こうしてリンディも転移し、残ったのはレミリアとフランだけそして霊夢たちが現れる。

「レミィにしては甘かったわね」

パチュリーの言葉に、レミリアはやれやれと首を振った。

「所詮私はコピーだからね、マスターの干渉を受けやすいんじゃないかしら？」

「そうだ、お兄ちゃんのところに早く行こうよ！お姉さま！」

と、フランがはしゃぐ

「蓮次様、大丈夫でしょうか？」

「大丈夫だとは思うんだぜ、だが早く戻るか」

「そーなのかー」

「後の問題はあの女ね・・・フェイトのことをなんていうのかしら」

と、霊夢が言うが、パチュリーがクスクスと笑っていた。その表情に美鈴が首を傾げる。

「パチュリー様どうしたんですか？」

「とうとう頭がおかしくなったのか」

チルノの言葉に、パチュリーが血筋を浮かべる。

「？の貴女にそれを言われたくないわね。ちょっとした細工をしたのよ」

「細工？」

「行けば分かるわ・・・あの女がどう罪を改めるかわかるわよ。後は私達の創造主に連絡を付ければこの事件は幕を閉じる。そして新たな舞台（ステージ）の幕は開けるのよ」

パチュリーは静かにそう言った。創造主とは当然神様のことだろう。

「ま、とりあえず帰りましょう。蓮次が心配だわ」

霊夢の言葉に一同が賛同し、時の庭園から一同はその姿を消した。

幻想11：Sister of the Devil（後書き）

というわけで、書き終えてからなんですけどホントやりすぎました。クロノファンっているか知らないけどごめんね。ほんと・・・でもきっとスカーレット姉妹が好きな方は気にいっていただけたと思います。

後2話で無印は完結です。A's では新たにあの人たちが登場します。お楽しみに！

幻想１２：罪と償い……そして最高の終劇へ（前書き）

というわけで、今回で無印は簡潔。２話くらい後日談してＡ－ｓ編です。
気づけば原作の無汁と同じ話数で一区切り！万歳！

ではどうぞ！

幻想１２：罪と償い……そして最高の終劇へ

プレシアｓｉｄｅ

・・・ここは、どこ？私は何をしていたのかしら？・・・そう、フェイトに折檻をして、ルシフェルという男にあった。その後気が遠くなって・・・思い出せないわ。暗い暗い空間・・・さながら地獄とも言いそうな場所。完全なる闇とでも言えばいいのかしら。自分の体が見えるのは不思議ね・・・これからどうしたものかしら

「初めまして・・・プレシア・テスタロッサ」

私の前に、一人の女性が現れた。見たことのない女性。誰かしら？

「貴女は何者？どうして私の名前を知ってるのかしら？」

言いながら警戒して杖を向ける。だけど女性は動じない

「・・・私は貴方達人間が神と呼ぶ存在、あるいは世界、あるいは宇宙・・・これ以上言うと苦情が来るから言わないけど・・・そうね、世界を支える存在であることには変わりないわ。そして私はある人物から頼まれて貴女の魂をここに呼んだ」

「世界を、支える・・・？」

言っていることが分からない。この女性は私をここに呼んだと言った。

「貴女に会いたいという子を連れて来たの」

そこに現れる金髪の少女・・・そんな・・・まさか・・・

「アリシア！」

「ママ！」

アリシアが私に抱きつく。涙が止まらない。会いたかった・・・ずっとずっと会いたかった。

「ママ、くるしー・・・」

「あ、ああ・・・ごめんなさい・・・また会えて嬉しいわ・・・アリシア」

「・・・うん、ママ」

私の言葉とは裏腹に、アリシアは元気のない返事を私に返した。何があったの？すると、アリシアは意を決したように私を見た。

「ママは、どうしてフェイトをいじめるの？」

その一言で、私は凍りついた。

「え・・・」

「フェイトはママが生んだ私の妹だよね？」

「でも、あの子はただの人形よ？貴女の妹なんかじゃ・・・」

必死に弁解しようとする私だったが、アリシアはどんどん怒った表情になっていく。こんなアリシアを、私は見たことがなかった。

「人形なはずないよ！あの子は・・・フェイトはあんなにママのことを思ってた！そんなフェイトが人形なはずない！」

「アリシア・・・」

「プレシア・テスタロッサ・・・何故貴女にここまでアリシアが怒るか分かりますか？」

神と名乗る女性は静かに私にそう言った。

「え・・・？」

「この子は見ていたわ・・・ずっとあなたの近くで全てをね」

「す、すべて・・・」

私がフェイトを折檻していたのも、血を吐いていたのも・・・全てを・・・？

「だからアリシアは悲しみ、怒り・・・心配をしている。」

「私ね、ママがずーっと心配だった。近くにいても声は聞こえないし、触ることも出来ない・・・ずっと無力だと思った。でも、フェイトがいるから少しだけ安心できた。ママを支えてくれてる存在・・・でも、ママはフェイトを否定した・・・」

段々と涙目になるアリシア。私は何をしようとしていた？アリシアとまた笑いあったりする日々を送るのではなかったのか？でも今はアリシアは？私はアリシアを泣かせていた。フェイトを傷つけ、泣かせていた。それは本当に私がすべきこと？違う・・・私は・・・私は・・・

「プレシア・テスタロッサ」

「・・・？」

「貴女のフェイト・テスタロッサへの罪は計り知れないほど大きいでしょう・・・しかしアリシアにこう言われた以上、貴女は罪を背負い、償って行く資格がある。この先、アリシアの笑顔と願いを望むならフェイトへの謝罪はあるでしょう。しかし、それによって生まれるフェイトへの偽の愛を、彼女に与えることは許されません」

――約束だよ

私の脳裏に、ある光景が蘇った。昔アリシアがまだ生きていた時、アリシアに何が欲しいかと聞けば、妹が欲しいと言われた。そうだ・・・私は・・・自分で成し遂げた約束を自分から放棄するところだったんだ・・・それは、アリシアに会いたいという願いから消え失せ、記憶の隅へと消えた。フェイトは・・・アリシアの妹・・・どんな形でアレ、私はあの子を生みだした。あの子だって私の娘だ。人形じゃない・・・私は今までなんてひどいことを・・・

「・・・私は」

「ママ」

アリシアが笑顔で私に抱きついてきた。

「大丈夫だよ、ママ・・・フェイトはきっと許してくれる。だから泣かないで」

「アリシア、そろそろ時間です」

「うん・・・またね、ママ。きっとフェイトに謝ってね」

フェイトがゆっくりと消え、私の意識もそこで潰えた。

蓮次side

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

目を覚ましてから、気が付くと家だった。そしてそこで事件の転末を咲夜から全部聞いた。とりあえず・・・

「やりすぎだろっ！」

正座するレミリアとフランに俺はとりあえず怒鳴ってみた。それに反応してビクリとさせるスカーレット姉妹。俺としては別に管理局の理不尽は許せなくてもそこまでする必要はないと思っていたが、もうこの二人が実行したからしょうがない。とりあえず殺したのかという問いに対してレミリアは「半殺しで許してあげたわ」というどうよという笑顔で俺がぶち切れした。

「だって、お姉さまがやれって言ったんだもん！」

「ちょっとフラン！？私だけに責任を押し付ける気！？」
と、ぎゃーぎゃー騒ぎ出す二人。最早カリスマの欠片もない。
「・・・二人とも、一週間おやつ抜きだな。咲夜、よろしく」
「了解いたしました、蓮次様」
「「ごめんなさい！やりすぎました！許してください！」」
半泣きで謝る二人は最早ただの子供だな・・・ま、許してやるか
「次からは俺がいない管轄で変なことしないこと。いい？」
「うん！お兄ちゃん大好き！」
と、フランが抱きつき、レミリアはただ頷いていた。
「いつまでふざけ合ってるの？」
そこへパチュリーが入ってきた。なのはとフェイト達に、フェイトのことを教えたらしい。フェイト本人も驚いてはいたが、それでも自分はプレシアから生み出されたのだから母はプレシアであることには変わりないという。現在なのははフェイトと一緒にプレシアを見ている。ユーノもだ。
「で、パチュリー・・・？さっき言った細工って何？」
と、霊夢が言う。そういえば細工ってなんのことだ？

「ああ、そのことね・・・今説明する所よ。まず・・・これ」
と、パチュリーが宝石を取りだす。紅い石・・・ルビー？
「これはね、蓮次をこの世界に送った神を私達が呼び出すことができるもの。万が一の事態や、連中の計画を潰せる唯一の方法としてあるものよ。簡単に通信しかできないわ。しかも一ヶ月に一回」
つまりそれは今はただの宝石と言うことだ。
「ま、神様の話は後ね・・・それでまず、私は魔法を使ってあることをしたわ」
「あること？」
「霊魂を呼ぶこと・・・すなわちこの世に霊を呼び寄せた。もちろんアリシアの魂」
恐ろしいことをサラっと言うが、彼女にとっては容易いことなのだろう。パチュリーは続ける。
「で、アリシアの魂と対話の後、彼女の魂を一時的にプレシアの中へと潜らせた」
「潜らせた？」
「そう、夢の中で会わせると言ったところね。それで説得するけど、子供一人じゃ不安でしょ？だから神様に補足で手伝ってもらうことにしたわけ」

なるほど～・・・でも・・・

「それって上手くいくの？」

「まあ、神様がいるから何とかなるでしょ・・・さて、次の段階に入るわよ」

「次の段階？」

「そう、とりあえずあのカプセルのアリシアを取りだすわ」

パチュリーの言葉と共に、咲夜やルーミア達がカプセルを外で破壊した。水が部屋の中でぐしゃぐしゃになったら溜まったものではないと咲夜談・・・素早く咲夜が服を着替えさせた。超ゴスロリ・・・咲夜、君ってこういうの趣味だったの？

「レミリアお嬢様の服です。いつも同じ服しか着てくださらないので」

「あんなフリフリの着れるわけないでしょ！？」

・・・うん、今のと大差ないよ？アリシアに触れて見ると、恐ろしいほど冷たかった。死体、か・・・こんな健やかに眠ってたらそんなことを思えないだろう。

「さてと・・・そろそろなんだけど・・・」

と、部屋の時計を見るパチュリー・・・何がそろそろなんだ？と、思った瞬間、その場所に光が走る。

『っ・・・！』

その光は何色とも言えない幻想的な光・・・その光はゆっくりとアリシアの遺体の中に消えていった。

「今のは、なんだ・・・？」

「見てればわかるわよ」

・・・は？

「う、う～ん・・・ふみゃぁ・・・」

「・・・は？」

先ほどまで眠っていた否、死んでいたはずのアリシアが目を開けて伸びをしていた。

「・・・何の冗談？」

「ふふふ・・・魔法関係者としては、こういう者を見るのは貴重ね」

「まったくだぜ」

と、パチュリーと魔理沙・・・あのー・・・これは？

「お兄ちゃんとお姉ちゃん達・・・ママを助けてくれた人？」

と、笑顔のアリシアちゃん・・・多分推定年齢５歳？いや、６歳か？

「俺達のこと、知ってるのか？」
恐る恐る聞いてみる
「うん、見てたもん」
「Ｗｈａｔ？」
思わず英語・・・どういうことだ？
「つまり、彼女はプレシアの守護霊としていたわけよ」
「幽霊としていた・・・と？」
「そうよ。でもルシフェルのせいで一度は冥界へ・・・だから私の魔法でここまで戻し、神様と説得させたのよ」
な、なんというでたらめな・・・
「さて、神様から聞いてるわね？」
「うん！この後の仲直りだよね！」
「そうよ、ちょっと待ってなさい」
そういってパチュリーがプレシアさんが寝る部屋へと入って行った。
待て！俺も行く！

プレシアｓｉｄｅ

私は見なれぬ部屋で目を覚ました。ここは・・・

「母さん！」

「・・・フェイト？」

そこにはフェイトと２人の子供がいた。

「私は、どうして？」

「時の庭園で・・・母さんが操られてて・・・それで・・・蓮次が助けて・・・えと、あの・・・」

操られた？まさか、あの男・・・？

「まさか、私が、大魔導士の私が操られるなんてね・・・」

「母さん、あの・・・」

「これくらい平気よ・・・」

と、手を払ってしまう・・・違う、私はこんなことをするべきじゃない。私は不安そうな顔をするフェイトの手を取る。驚いた顔になるフェイト・・・当然よね

「母さん？」

「フェイト・・・今までごめんなさいね」

「かあ、さん？」

私はフェイトを抱きしめる。似ている・・・あの子を抱きしめる時と・・・そうよ・・・この子は私の娘よ・・・同じに決まってるじゃない。

「フェイト、あのね・・・？あなたは・・・」

「大丈夫だよ母さん・・・私、全部聞いたの・・・パチュリーさんに・・・私は母さんの娘のアリシアの代わりだった・・・」

「フェイト・・・」

この子のことを知っている人間がいた・・・！？パチュリーと言う人物が誰かは分からない。もしかしたら・・・全て私はその人物の手で踊らされたのかもしれない。でも、今のこの気持ちに嘘はない。

「いいえ・・・それでも、ようやく気付いた。貴方は私の大切な娘・・・フェイト」

「母さん・・・」

自然と涙がこぼれる。フェイトからも涙が流れていた。

「・・・お取り込み中失礼するわ」

そこへ、紫色の髪の女性が入ってきた。

「パチュリーさん、それに貴方も・・・」

この人物が、パチュリー・・・それとフェイトくらいの少年が一人。
この子も確かジュエルシードを集めていた子ね

「フェイト、話はできた？」

「はい」

フェイトが嬉しそうに頷いていた。自然とこの子の笑顔を見て顔がほころぶ

「ならいいわ・・・プレシア・テスタロッサ」

「なにかしら？」

「貴女は理解したかしら？自分の罪、そしてその償い方を」

「ええ、もう迷わないわ・・・」

私の言葉に、パチュリーと呼ばれた女性は笑っていた。

「そう・・・ならフェイト、プレシア、貴方達に最高のエンディングを用意してあげるわ」

「最高の、エンディング？」

「入ってきなさい・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・アリシア」

・・・え？

「はーい！」

と、元気よく入ってきたのは私の娘、アリシア。私はあまりの事態に驚き、腰を抜かした。フェイトと隣の少女と少年も驚いている。

「ママ～フェイト～」

嬉しそうに私とフェイトに抱きつくアリシア。嘘、でしょ？

「ゆ、幽霊？」

「ひぃ！？」

フェイトの隣にいた少女が悲鳴を上げる。どうやらお化けが駄目らしい

「ママひどいよ、脚付いてるもん！」

と、飛んで跳ねるアリシア・・・本物・・・生きてる・・・

「アリシア！」

「あははは・・・いたいよ、ママ」

「さて、最後の仕上げね」

と、パチュリーが私の所へ歩み寄った。

「何を・・・？」

「私はありとあらゆる魔法を知る魔法使い・・・アリシアにもよいエンディングを用意するの」

彼女の手から光が走った。目を閉じる。次の瞬間だった・・・

―――ギャアアアアアアアアアアアアアアアッ！

悲鳴が聞こえた。

「な、何よそれ・・・」

目の前には悪魔とも言えるような生物がパチュリーの手で苦しんでいた。それと同時に体が軽くなる。

「これは貴方の身体を蝕んできたそうね・・・名前は“Ｃｕｒｓｅ”随分厄介な魔法を喰らってたのね。まあ、やった人間の察しはついてるからいいとして・・・次はこれよ。飲みなさい」

言われるがまま薬を飲んだ。するとどうだろうか？肌の張りが良くなり、手の皺が消える。顔を見ると、皺が消えていた。

「これは・・・」

「言ってみれば若返りの薬よ。まあ、肉体の細胞を増やしたというのが正しいかもしれないけど・・・これが全てにおける最高のエンディングよ」

蓮次ｓｉｄｅ

とりあえずひと段落してから、パチェがカース・・・呪いを封印して消し去った。

「パチェ？それって・・・」

「十中八九、あの男よ・・・さ、なのは、ユーノ？家族団欒を邪魔するのはいただけないわ。出ましょう」

「は、はい！」

「う、うん・・・」

こうして部屋を出る俺達。パチェってとても気がきくな

「そうかしら？」

「うん、とっても」

俺が言うと、パチュリーは恥ずかしそうにその場を後にした。長きにわたった戦いは一時幕を閉じる。

幻想１２：罪と償い……そして最高の終劇へ（後書き）

というわけで今回の小説でもプレシアさんは旅立たないというね・・・
・私も甘いんでしょうが、これこそ最高のエンディング

では、後2話分無印編をお楽しみくださいませ・・・でわ

幻想１３：　スキマの来訪（前書き）

というわけで、今回はあの人が来ます

今回はどうして彼女達がデバイスなのか？その秘密に迫ります。さあ、どうなることやら・・・

今回は結構話の核心部分です。最後の方でも一気に伏線をぶちまけるので、気になる人だけ読むというのも良いかもです

読むんですね？

幻想１３：　スキマの来訪

蓮次ｓｉｄｅ

これで俺達の戦いは一度幕を閉じた。テスタロッサ一家の救済により、この世界の歴史は別の方向へと時が進んでいくらしい。夜２時・・・俺は何かを感じて起き上がった。なんだかとても空気が重い。何故だろうか？

「・・・・・？誰か、いたような」

そんな気配がして、周囲を見渡した。でも誰もいない。その時だ、次元が『裂けた』のは

「！？」

「・・・あら、私を知ってるのに驚くことはないでしょう？」

そこにいるのは金髪に紫色の服とフリルのスカートをはいた女性。『東方Ｐｒｏｊｅｃｔ』を知っている人間で、この人物を知らない人間の方が少ないだろう。

「八雲、紫・・・」

「正解。初めまして？紅蓮次君」

言いながら紫は『スキマ』から降り立ち、椅子に座った。

「うふふ、なんとか世界を変えたみたいね・・・偉いわよ」

「貴女もユニゾンデバイス？」

俺が聞くと持っていた扇子を口に当ててクスクスと笑う。

「そう思う？」

「・・・信じたくないけど、ユニゾンデバイスって感じがしない」

まず、魔力の流れが普通のデバイスとは明らかに違う。みんなとユニゾンしているからか、それがはっきりと理解できる。

「そこまで分かるようになったのね。あの子選択は間違ってなかったわけか・・・」

「じゃあ、貴女は・・・やっぱり」

「ええ、そうよ・・・ＺＵＮの制作弾幕シューティングゲーム『東方Ｐｒｏｊｅｃｔ』に登場するスキマ妖怪『八雲紫』は私のことよ」

ほ、本物の、八雲紫・・・ファンが聞いたら卒倒しそうだな

「どうして、貴女が？」

「私が動く時はどういう時か知ってる？」

「幻想郷に関わる危機や、幻想郷のため」

「正解」

相変わらずクスクスと笑う紫はどこか妖艶であり、不気味でだった。

「・・・でも、どうして俺のところに？」

「あら、随分と私をすんなり受け入れたわね」

「別世界があるってことは、俺の世界に“幻想郷があった”っていう事実があるんだろ？」

もう、普通のことじゃ驚かないさ

「正解よ・・・随分と理解が早いのね」

「こんな非日常ばっかり経験してればそっとやちょっとじゃ驚かないようになる」

「そうね・・・まあ、それはいいわ。貴方に話をしようと思ってね」

「話？」

一体何のことやら・・・

「まず、貴方の運命をねじまけた神と天使は、次にここで起きる事件でも介入を起こす。貴方は最悪の結末を最善の結末に変えることになるわ。そうすれば運命の力は変わって行き、２人の力は段々と消えていくの」

「つまり、Ａ，ｓ編に介入しろってことか？」

「そうよ。だからこそ、貴方に力を貸してあげるわ・・・新しいユ

ニゾンデバイスは明日送っておくから・・・そうすれば分かるわ」

そう言ってほほ笑む紫。こういう笑い方をしてる時は、大方自分に有益になることか、幻想郷に対して有益になることをする時に他者を利用する笑みだ。ここらで疑問をぶつけて見ることにしようかな・・・

「八雲紫、質問が「紫でいいわよ？」紫、質問がある」

「なにかしら？」

「一つ目・・・何故俺に協力する？正確には俺をこの世界に送った神様になんだろうが・・・」

俺が言うと、またニヤリと紫は笑う。

「簡単な話よ？貴方に死なれたら困るの」

「それはハデスとルシフェルを倒せなくなるからか？」

「そうね」

「なら何故貴方達が直接戦わない？やろうと思えば貴女は霊夢たちを利用することだって難しくないはずだ」

そもそも、あの神様との仲も不明だ。それに本物の博麗霊夢や霧雨魔理沙の方が紫にとっても幻想郷の人間が強くなるという点でプラスが生じているはずだ。何故だ？

「理由はいくつかあるわね・・・まず、この世界は貴方の元の世界

とこの世界では次元が違う。それによって空いた穴を埋めるのは大変なの」

「つまり、紫にとってリスクが大きいと？」

「そうよ。そして２つ目の理由・・・貴方という存在」

俺の存在・・・？

「貴方は運命を変えられてしまい、死を迎えた・・・もちろん、貴方の恋人や家族もね。その想いの力は『復讐』という大きな負の力・・・貴方の陰と陽では陰の方が強い。それこそ幻想郷に存在する妖怪や神たちよりも強い・・・そんな力を持っている人間の方が神を打ち破る確率はグンとあがるのよ」

つまり、俺は神とあの堕天使を撃ち滅ぼすために利用されているということか。もともと利用されている意識はあったが、そう言う理由があったのか

「そして３つ目・・・これはあの神のお願いね」

「あの神様の？」

お願いって・・・

「あの子は幻想郷に入るはずだった神様なの・・・まあ、東方Ｐｒｏｊｅｃｔにもいない、神様だから知らないでしょう。それに入るはずだったのだからね」

「はず、っていうのは？」

「その入る直前で運命を変える神々の戦いが起きた。だからあの子はそれを止めるために存在を確立し、人々から忘れ去られるはずが神に存在を確立されてしまい、幻想郷に入ることはなくなった・・・人々に忘れ去られていても、他の神に忘れ去られないことは人々の信仰が少なからず存在しているということ。それから少しだけ顔見知りということもあるからと言っておくわ」

・・・とりあえず、紫の協力理由は分かった。次は・・・

「次の質問だ・・・貴女が今回の件に関わったということは、少なからず幻想郷が絡むはず・・・ハデスとルシフェルがこの世界に来たことで幻想郷に異変が起きたということか？」

俺がそれを聞くと、紫は少しだけ難しい顔になった。どうやら真の目的はそっちにあるらしい。

「そうね・・・貴方は異変の定義を知ってる？」

「定義？」

俺は首を傾げる。幻想郷での異変・・・赤い霧と紅い月の夜。春の季節に春が来ない幻想郷・・・夜が明けない日・・・いろんな異変があるが・・・

「異変というのは誰かが気づいて初めて異変たりえるもの。世界中の建物や人が毎日1ミリずつ縮んでいるとしたら気づくのはいつだと思う？今回幻想郷で起こった異変はそう言う異変なのよ」

「人が気づかなくなる？」

「私達の住む世界の幻想郷と貴方の住む本来の世界には私と博麗神社による結界によって幻想入りすることが出来ないように出来ている。でもハデスとルシフェルが世界を離れたことでそれぞれの世界のバランスが崩れ始めたの」

世界のバランス・・・？

「幻想郷の今回の異変・・・それは、幻想郷からの存在の消滅」

「・・・は？」

「幻想郷に存在する数多くの妖怪、人間、半獣、半霊、妖精が次々と消えていく。幻想郷のバランスが変わり始め、その幻想郷に深く存在を確立させた人物が次々と消え始めているの」

どういうことだ・・・？

「貴方に神が与えたユニゾンデバイス・・・それは幻想郷の住人達のコピーだった・・・そう説明を受けたはず。でも違うのよ」

「違うって・・・まさか！？」

「そう、彼女達は本物よ。今は私がそう言うふうに記憶を植え付けているだけであり、彼女達の魂は本来の物なの・・・幻想郷という名のユニゾンデバイスは私と神が作り上げた魂の制御装置に近いもの。」

「魂の制御装置？」

なんだそりゃ・・・

「つまり、存在の消滅は肉体の消滅ということ・・・でも、魂は残るわ。それは意思を持ち、確立して漂う。私は神に協力を得てそれらを貴方の身体のユニゾンデバイス『幻想郷』に留めた」

つまり、俺という存在が紫にとっても必要だったということか・・・？

「だからこそ彼女達の存在をどこか別の場所に確立して留める必要があった。例えば、信仰によって幻想郷で人々の根本に深く根付いていた早苗や諏訪子、神奈子も身体が消えている。魂を留めるのは難しいのよ、例え神様でもね。急ピッチで私と神、藍が霊夢、魔理沙を始めとして、紅魔郷に登場した深く根付く人物たちをなんとか繋ぎとめた。つまり貴方の身体に一体化したユニゾンデバイスは彼女達と一心同体というわけ」

・・・だいたいわかったけど

「他の人物はどうなんだ？幻想郷に存在を確立している奴らはいるのか？」

「・・・はっきり言って壊滅状態よ。異変を起こしたことは原因を良くも悪くも烏天狗の射命丸文が新聞として公開する・・・それによって消えていくの」

つまり、ゲームに登場した人物たちはことごとく存在が消えていくというわけか

「これによって名も知らない弱小妖怪たちが人を襲い始めることに

なる。今は藍を神に頼んで別の制御装置と連動して幻想郷で潰し続けてるけど・・・後どれだけ持つのかは分からない。幻想郷にいる以上、世界の崩落が起き続け、人々は消えていく・・・そして最後には、幻想郷の消滅がきっかけで貴方の世界も消え去る」

「・・・っ！」

つまり、幻想郷が消えるリミットは俺の世界の寿命とも言えるということか・・・！

「幸いにもこの世界と私や貴方の世界とは時間の流れがだいぶ違うの。この世界での一日は私達の世界では1分になる。10年なんて経ったら大変だけど・・・私と藍がなんとか弱小妖怪どもを黙らせるわ・・・その間に、貴方達は何としても連中を倒すの」

それが八雲紫の狙いであり、世界の崩壊を防ぐ理由だったのか・・・

「私ができるのは貴方にユニゾンデバイスとして彼女達を現世に魂をとどまらせて戦うこと・・・これ以上ここにいるわけにもいかないわね・・・後は頼むわよ？蓮次」

「最後に一つ聞かせてくれ、紫」

「何かしら？」

「貴女の言葉には嘘偽りはなく、俺はこの戦いが終われば元の世界に帰ることはできるのか？」

俺の言葉に、真剣な表情で紫は頷いていた。

「我が名に賭けて、嘘偽りがないと言わせてもらうわ。そして、貴方も戦いが終われば帰ることが出来る」

「そうか・・・」

「では、ごきげんよう？」

こうして紫はスキマを開いて消えていった。

「・・・全ては明日、今度は誰が来るんだろうか？まあ、寝るか」

こうして俺は目を閉じ、深い眠りに着いた。

紫ｓｉｄｅ

「・・・さて、とりあえずあの子が頷いてくれた」

スキマの中で、存在を留めた子たちを見る。彼女達の魂は眠り、別の制御装置になじむまで時間がかかる。それは烏天狗の３人や里の教師、月の頭脳、花の妖怪・・・数えればきりがないけど、なんとか留めた。あの子たちを手助けするにはもっと力がいるにちがいない。

「我ながら女々しいわね・・・人に助けを求める、なんて」

本来私も消え去る可能性が高い。私は幻想郷の根本なのだから当然になる

「ハデス、ルシフェル・・・この八雲紫に・・・幻想郷に喧嘩を売

ったことを必ず後悔させてやるわ・・・それまではせいぜい、運命の子と戦っているのね・・・」

私は静かに呟き、幻想郷へと戻ることにした

蓮次ｓｉｄｅ

朝・・・俺は身体を起こしてドアを開けた。そこにいたのは霊夢や魔理沙たち・・・そして

「あらぁ～おはよう蓮次ちゃん？」

「おはようございます」

「「「おはよう～」」」

「おはよう」

「シャンハ～イ！」

「あら、おはよう」

西行寺幽々子、魂魄妖夢、プリズムリバー３姉妹、アリス・マーガトロイド、上海、レティ・ホワイトロックである。つまり妖々夢のメンバーというわけだ。これが魂を留めたメンバーか・・・橙がいないが、藍を手伝っているのか？まあ、紫も動かせる式神が消えるのはまずいと判断したんだろう。幽々子は既に朝食を食べ、妖夢は咲夜と料理に追われている。プリズムリバー３姉妹も意気揚々と飯を食べ、アリスはパチェと激闘を繰り広げている。大方魔理沙をめ

ぐってだろう。そして・・・

「シャンハーイ！」

「・・・なんで俺の頭の上？」

嬉しそうに上海が頭の上に乗っている。そしてレティはチルノと遊んでいる。メンバーが増えたな・・・上海は置いておくとして

霊夢、魔理沙、チルノ、ルーミア、美鈴、咲夜、レミリア、フラン、パチュリー、レティ、ルナサ、メルラン、リリカ、アリス、妖夢、幽々子・・・１６人・・・なんだが部屋も前より広くなった。どういう構造で広くなったんだよ・・・そう思いながら食事を食べる。相変わらずフランが俺の隣にいるのはいつものことだ。まあ、変わったことは上海が頭の上にいることだろうが・・・

「そういえば蓮次、昨日紫が来たらしいわね」

「え？」

突然の霊夢の言葉に驚く。まさか会話を聞かれたのかと思う。

「幽々子がいるってことは、紫がここに届けに来たってことでしょ？コピーを」

「え？ああ、そうみたいだな」

そんな会話の後、学校に行くために家を出る。今日はいつも通り咲夜がミニサイズでポケットに入り、もう一人・・・

「じゃ、行こうか咲夜、妖夢」

「はい、蓮次様」

「ええ、行きましょう」

ドアを開けると、なのはとフェイトが待っていた。

「おはよう蓮次君！」

「蓮次、おはよう」

「うん、おはよう」

テスタロッサ一家はとりあえず高町家に保護。プレシアさんは翠屋で働いている。アリシアももうすぐ学校に行くことになるらしい。

「じゃ、行くか」

こうして学校へ向かう。これから新しい一ページが開かれる。そう、この時は思ってもいなかった・・・新しい戦いで、波乱が巻き起こることを・・・

――無印編　完

幻想１３：　スキマの来訪（後書き）

というわけで無印編完結！

一応小説はこのまま続くのでお楽しみに！

幻想１４：魔法少女達と魔法少年の日常（前書き）

久しぶりの更新

今回は日常です

てか、しばらくは日常です

幻想１４：魔法少女達と魔法少年の日常

フェイトＳｉｄｅ
皆さんこんにちは、フェイト・テスタロッサです。私の家族は３人家族で、母さんと姉さんの三人。色々あって、今は親友になったなのはの家に居候しています。平和になって、母さんが優しくなって・・・お姉ちゃんができて・・・友達もできた。学校も楽しく通っています。この前まで戦いの中にいた自分が嘘みたいに

「おはよ、フェイトちゃん♪」

「うん、なのは」

現在なのはの部屋で寝泊りしています。アリシア姉さんはまだ寝ています・・・年だと私より下だから・・・まあ、まだ寝かせておこう。現在５時半。一緒にトレーニングをしに丘の公園に向かいました。練習内容は空き缶をシューティングで落とします。アクセルシューターを操るなのは。つい最近まで普通の女の子だったのに、ここまでするのはすごい。

「次はフェイトちゃんなの！」

「うん、バルディッシュ」

『Ｙｅｓ，　ｓｉｒ』

同じように、バルディッシュでシューティング。正直のところ私は少しだけこれが得意だ。前にリニスに叩き込まれたし。スフィアは全て缶を貫き、見事ゴミ箱の中へと入った。

「フェイトちゃんすごーい！」

「なのはもこれくらいすぐにできるよ」

こうしてしばらく練習した後、朝食を食べになのはの家へと戻ることにした。

高町家

「「ただいま～」」

「「「「「おかえり～」」」」」」

高町家の皆さんと、母さんと姉さんがすでに朝食の準備をしていました。二人でシャワーを浴びてから、席に着きます。

「おはよう母さん、姉さん」

「ええ、おはようフェイト」

「おはよー！フェイト！」

母さんと姉さんが笑顔でそう返してくれます。実を言えば、ここにいる高町家の皆さんはすでに魔法のことを知っています。少し前になのはが事件に巻き込まれたことがきっかけ。そのきっかけになったペット否、異世界の友達ユーノは集落に戻った。私たちの事件の発端であるジュエルシードはある人に預けているので、それを伝えに言ったらしい。正直、それを管理する組織はあまり信用できなか

ったから。

「さあ、食べましょう」

「「いただきます」」

食事が始まり、食べる。最近は母さんも熱心に料理の勉強をしている。母さんはここ数年料理をしていなかったらしくて、桃子さんに教えてもらっていた。うん・・・とってもおいしい。食事を終えて食器を下げて、私たちは出かける準備をする。ある人の家に行くためだ。

「「「いってきまーす」」」

私たち3人、私を含めたなのはと姉さんはある人の家へと行くことにした。今日は休日なので何の問題もない。休日を楽しく過ごしたい。数分して歩いた場所に彼の家はあった。大きな家・・・私はインターフォンを鳴らした。

ピンポーン

『はい。どなた様でしょう?』

凛とした声が聞こえた。この人は・・・

「こんにちは咲夜さん、フェイトです」

ある人のお付のメイドさんで、ユニゾンデバイスの十六夜咲夜さんだ。

『フェイト様・・・ということはなのは様とアリシア様も？』

「はい、います」

「いるよ～！」

なのはと姉さんが答えると、扉が開く。そこにいるのは美人のメイドさん、咲夜さんだ。咲夜さんはクツを鳴らして姿勢を正すと一礼してくれた。

「ようこそ、フェイト様、なのは様、アリシア様、紅家へ」

「「「おじゃまします」」」

こうして家の中へと入って行った。家の中に入ると、私と同じ金髪の女の子が駆けて来た。

「みんないらっしゃ～い！」

「おはよう、フラン」

口にソースを付けた金髪の少女、フランが迎えてくれた。フランも同じくユニゾンデバイスだ。まだご飯の途中だったのかな？

「お兄ちゃんならリビングで本読んでる！一緒に遊ぼ！」

こうしてフランに連れられてリビングへ。そこには沢山の人がいる。魔法使いの人、巫子の人、お化けの人、なのはは毎回このお化けの人にびっくりしているけど・・・その部屋のソファーで本を読んでる人物に、私達は会いに来た。もちろんみんなにも会いに来ている

けど

「蓮次！おはよう！」

「ああ、みんな・・・おはよう！」

私達に平穏をくれた、大切な友達です。

なのはｓｉｄｅ

どうも、なのはです。今日は蓮次君の家に遊びに来ました。というか、お休みは毎日ここで遊びます。予定が合う日はアリサちゃんとすずかちゃんも含めてです。今日はなんでもパチュリーさんがアリシアちゃんに用があるとか。一体なんだろう？あ、パチュリーさんは「動かない大図書館」って呼ばれるくらい魔法のことやいろんなことを知っていて、常に本を読んでいるお姉さんです。

「さて・・・アリシア、貴女って確か魔法を使えないのよね？」

「うん、お母さんがリンカーコアがないって言ってたよ？」

プレシアさんが言ってたね、確かに。でもどうしたんだろう、なんだか難しい顔をしているよ？

「・・・やっぱり蘇生した時に魔術を使ったの原因ね・・・でも、やっぱり・・・」

なんだかブツブツと言ってる。どうしたのかな？

「おいパチェ、自分だけで納得しないでくれないか、説明を頼むよ」
蓮次君が言う。確かに、私も知りたいもん。フェイトちゃんたちも知りたそうな顔してるし。
「・・・ああ、ごめんなさい。実はアリシアにリンカーコアが存在しているのよ」
「「「「え？」」」」
私達４人は首を傾げる。リンカーコアはなかったんじゃ？
「それがね・・・蘇生時に何の因果か・・・アリシアにリンカーコアが形成されているの。原因は私でも分からない。リンカーコアはまだ小さく、普通の検査じゃ発見されないごく微量なもの。でも将来はきっとフェイト達と同列か、あるいはそれ以上になる才能を秘めているわ」
「本当！？」
と、アリシアちゃんが嬉しそうに飛び跳ねる。魔法が使えるんだ・・・やったねアリシアちゃん！
「ただし」
「？」
「魔法を使うということは、これから先ハッキリ言って貴方達には必要がないことよ？レイジングハートもバルディッシュも、使うことはない・・・管理局に入ったりするなら話は別だけど・・・まあ、

相棒を手放すことはないでしょうから2人はいいとしても、アリシア・・・あなたに魔法は必要？」

パチュリーさんの言うとおり・・・もうジュエルシードはないし、地球で魔法を使えるのは本当に一握りの人間だけ・・・事件もないし、戦うこともない。それなのに魔法を使うことはないと思う。アリシアちゃんはしばらく黙っていたけど、パチュリーさんを見る。

「私、魔法を覚える！」

「理由は？」

「確かに、もう事件もないし・・・魔法は使わないかもしれない。でも逆に、魔法を使わないといけない日もあると思うの。もし魔法を使うようなことになって使えなかったら、私役立たずで、なのはやフェイト、蓮次の役に立てなくなっちゃう。そんなの絶対イヤ！だから魔法を覚えて、もしもの時にみんなの役に立ちたいの！」

「・・・・・・・・そう、それが危険を伴ってもかしら？」

「もういいんじゃない？パチェ」

「蓮次？」

蓮次君が少しだけ困った顔をしていた。

「アリシアの決意も固いことだし、小さい子にそれ以上言うこともないよ」

「私はアリシアの覚悟を聞きたいの。魔法を使うようになるということはそれだけの危険があるのよ？それは私や魔理沙、アリスが分かっていることよ。それになのはやフェイトも、血反吐を吐くような特訓で今があるの。この年齢の子に魔法は必要かしら？」

パチュリーさんの言うことがとてもわかる。力を秘めている。それは危険がある。今のアリシアちゃんが使うことは、どんな危険があるか分からない。

「その危険なことを守るのも、俺達の役目だろ？それとも『動けない大図書館』でもできないことがあると？」

蓮次君の言葉に、パチュリーさんが血筋を浮かべる。

「いい度胸ね蓮次・・・この私に喧嘩を売っているの？」

「さあ？俺は『アリシアの意思を尊重しようぜ？』って言っているだけだけど？」

「もういいわ、なら責任は取りなさいよ？蓮次」

パチュリーさんの言葉に、蓮次君は頷いていた。

「当然だろ？俺も同じ、魔法を使いきれてないんだ・・・一緒に頑張るんだからな」

ほぇ？

「蓮次君、魔法を使えてるよね？」

「・・・ああ、確かにユニゾンしたらな。でもユニゾンしてないとBランク以下・・・なのはに手も足も出ないんだ。だからプレシアさんにデバイスを頼んでる途中」

そういえば、ユニゾンデバイスのみんなはいてもインテリジェントデバイスはないんだよね。

「ま、なんとかなるでしょ、頑張ろうぜ」

こうしてアリシアちゃんは私達と同じく魔法を使うことを決心した。

アリシアｓｉｄｅ

こんにちは！アリシア・テスタロッサです！魔法を使えることが分かって、パチュリーさんにも使うか言われて、蓮次が一緒に頑張ると約束してくれました。嬉しいな～♪

「でも、どうやって練習するの？」

御庭に出てみんなも見てる。レミリアさんなんかは紅茶を飲んでるけど

「簡単だぜ、こうやって、こう！」

魔理沙さんが箒で一気に空へ。ふぇぇぇ！すごい！

「魔理沙・・・そんなこと言われてもわからないよ」

蓮次の言うとおりだよ、そんなこうやってって・・・どうやればい

いの？

「そうね・・・私達と貴方たちじゃ魔力の傾向は違うわ」

「どう違うんですか？」

フェイトがパチュリーさんに聞く。確かに、どーちがうのかな？

「そうね・・・貴方達はリンカーコアを媒体にしているけど私達はまた違うのよ。例えばだけど・・・私の場合は本に描かれた魔法陣に己の魔力に乗せ詠唱する。それによって魔力が肥大して魔法を発生させる・・・・・他にも色々あるけどそうね・・・」

うう、言ってることがわからないよぉ～

「パチェ、ちょっと待って・・・もうちょっと分かりやすく」

「ああ、ごめんなさい・・・そうね、簡単に言えば魔力というのは身体に宿る気を魔力に変えて促すタイプと、貴方達のようにコアを中心にして出すタイプがいるということ。だけど根っこは同じよ。できるだけ心を無にして魔力を感じ取る」

心を、無？

「何にも考えないってことか？」

「そうよ・・・自然と、周囲と、全てと一体化する。それにより全ての流れを感じるの。やってごらんなさい」

言われた通りにやってみる。ムムムム～・・・む、難しいよぉ

「意識しては駄目、もっと静かに・・・無に出来なくてもそれに限りなく近く・・・目を閉じて目の前にある物を見つけて見て」

目を閉じて見えるもの・・・それはただただ黒い空間。何もない、何も感じることはない・・・でもなんだろう、イメージが出来る。身体を駆け巡る魔力が血の流れているのと同じように流れている気がする。

「「・・・・・・・・・・」」

「魔力はリンカーコアが元・・・なら、イメージしながらその流れを追ってみて。無から段々と、イメージする。それが実際の物と一致するのならば・・・それは貴方達の力になる」

目を閉じてじっとする。なんだろう・・・綺麗な光がイメージできる・・・これがリンカーコア？とても小さな光・・・今にも消えてしまいそうで・・・支えていないと、その暗闇から落ちてしまいそう・・・まるで暗闇に輝く1つの星・・・

「はい、そこまで」

パンッと手を叩かれて、私は我に返った。

「今二人とも微力ながら魔力を感じたみたいね・・・良いセンスよ」

「でもさ、俺とアリシアはこうしないと魔力を感じないけど、なのはやフェイトはどうなんだ？」

そういえばそーだよね・・・フェイト達はどうなんだろう？

「この二人は規格外よ。特になのははね」

「ほぇ！？あたしですか？」

「そうよ・・・フェイトはこれに似た修行によって強くなったのに、あなたはわずか数カ月で魔法を使いこなしている。多分勝負なんかしたら・・・今のなのはならフェイトとほぼ互角に渡り合えると思うわ」

な、なのはすごーい・・・

「なるほどなぁ・・・」

「さて、どうかしら二人とも？どんなイメージがあった？」

「うん！綺麗な白い宝石みたいなのが見えた！」

「俺は蒼い宝石が見えた」

「それが二人の魔力光になるものよ。きっとなのはは桃色、フェイトは金色の光を感じることができるはず」

パチュリーさんの言葉に、二人は頷いていた。へぇ～

「まあ、貴方達がまともに魔法を使うにはしばらくかかるわ・・・そろそろ中入りましょう。クラクラするから」

「パチェ、またビタミン足りてないの？」

「そうみたいね」

なんて話をする蓮次とパチュリーさん。何の話だろう？そんなことを思っていると、咲夜さんが出て来た。

「皆様、昼食の準備が整いました。どうぞこちらへ」

「うん、ありがとう咲夜・・・それに妖夢もかな？」

「ええ、早くしないと幽々子様に全部食べられちゃいますよ？」

む、この前幽々子さんに食べたいもの取られちゃったし、負けないぞ～！

「わーい！ごはん食べる！」

こうして私は蓮次の家のリビングへと戻る。再び生を受けた私は、こうしてみんなと楽しい暮らしをしている。

蓮次ｓｉｄｅ

昼食を終えて、みんなでだらけタイム。プリズムリバー３姉妹が静かな演奏を奏でてくれるのでかな～り待ったりできる。トランペットとかでも静かな音楽の演奏ができるようになるんだな・・・それにしても・・・

「みんななんで俺の回りに寄るのかな・・・すごい暑いんだけど」

右になのは、左にフェイト、膝の上にアリシアとフランが乗って、

頭の上には上海がいる。後ろではチルノも寝てるし・・・床では大の字になって美鈴が寝ている。他のみんなも音楽に聞き入ってしまったのか、ぐっすりと眠っている。食後に寝ると牛になるぞみんな・・・

「蓮次大丈夫？」

「ん？大丈夫だよレティ」

レティが俺を心配してくれた？なんか意外だ

「なんか失礼なことを考えたでしょ」

「気のせいだよ」

「ちなみに気をつけなさいよ、チルノは寝てると無意識に冷気を出すの。首が凍傷になっても知らないわよ」

「げっ・・・」

そういえばさっきから首筋が寒いと思ったら・・・

「仕方がないわね」

やれやれと言った感じでレティはチルノを抱き上げた。

「チルノはそっちのソファーに寝かせるわ」

「ありがとレティ」

「どういたしまして」

何気ない会話を交わしているうちに、俺も段々と眠くなってきた。
次の物語でも、きっと運命を変えて見せる。待っていろ・・・・・・
・・・必ず倒すぞ、ハデス、ルシフェル

幻想１４：魔法少女達と魔法少年の日常（後書き）

レティがいい人・・・否、良い妖怪になってる・・・黒幕なのに

次回は多分・・・大魔導士のあの人の日常になります

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9013p/

魔法少女リリカルなのは〜運命を欲する男〜

2011年7月27日22時38分発行